回顧　折々の木

創立 70 周年を記念し
後世に伝えたい
思い出深いできごと
これに関わった人々の熱い想いを
35 編のトピックに取りまとめました

後世に伝えたい　思い出深いできごと

回顧　折々の木（もくじ）

No.	タイトル（主要事業等）
1	**「静岡県木材史」の発刊**　～次代の人達への贈り物（1968）
2	**受け継がれてきた３つの慶弔催事**　～先達に想いを寄せ、協同組合の精神で（1959～）
3	**２つの全国団体**　～全木連と全木協連とは？（1954～）
4	**JAS としずおか優良木材**　～木材の品質規格、オールジャパンと地域限定（1950～）
5	**国産材時代を支える**　～林災防と林技協の歩み（1964～）
6	**高度成長期、住宅産業への挑戦**　～「木質パネル量産住宅」の残したもの（1965～）
7	**インドネシアの森林開発**　～SICOR・本県木材業界史の一断面（1970～1980）
8	**なぜ？ 全国唯一の県庁内事務所**　～木造２階建て木材会館から県庁西館９階へ（1974～）
9	**県内 PR 展示会も時代と共に**　～木材ショー、住宅展・住まい博、暮らし博へ（1970～1973、1982～）
10	**団体報も時代に即し**～お知らせ広報、林野庁長官賞、IT 化対応、そして？（1973～）
11	**木材 PR キャラバンと２つの全国会員大会**　～静岡県木青連の総力を結集！（1975～、1981＆2004）
12	**木材不況、構造変化への対応**　～再編整備、拠点整備、体質強化（1982～1989）
13	**学校内装は木材で** ～行動マニュアルの集約と PR 資料の作成（1982～）
14	**木材 PR は無理なく、息長く**　～シリーズパンフレットの企画発行（1983～）
15	**県産優良素材展示即売会** ～随意契約からシステム販売へ（1984～）
16	**２年間にわたる「マウス実験」**　～地域研究機関への委託研究の成果（1986～1987）
17	**「もえる・くさる・くるう」の克服**　～産官学連携による技術開発（1986～1991）
18	**「木の日」って何だっけ？**　～決起大会から市民参加型「もくもくまつり」へ（1986～1997）
19	**人材の育成、時代と共に３種のセミナー**　～有料化の試行・グループ研修・異業種連携の模索（1986～）
20	**重ねた年輪を手づくり出版**　～静岡大学林産学科創設 25 周年を記念して（1987＆1991）
21	**タテ・ヨコ・ナナメ**　～業界情報の集約と課題の協議（1988～）
22	**業界のシンボル**　～県民公募の愛称は「もっくん」（1988）
23	**森を愛するカレンダー**　～創立 50 周年記念事業（2000）
24	**雇用問題、この 30 年**　～「３K 職場」の実態調査と「働き方改革」、外国人技能実習制度（1989＆2019）
25	**素材生産の夜明け**　～素材生産部会の発足と人づくり基金（1993～）
26	**「第５の外材」その産地を訪ねて**　～北欧木材産業の視察調査（1994）
27	**1.17 阪神大震災余話**　～実大振動実験「強さの実証、倒壊の反証」（1995）
28	**ダイオキシン・ショック**　～焼却処理問題への対応（1997～）
29	**森林につながる家づくり**　～顔の見える家づくりネットワーク化のすすめ（1997～1999）
30	**シックハウス、シックスクール問題への対応**　～新築住宅 44 棟のホルムアルデヒド計測調査（1998～2001）
31	**国産材・地域材の PR 活動**　～首都圏展示会への出展（2001～2002、2015～）
32	**組合を窓口とする諸制度の運用と組織の強化**　～登録制度と証明制度、県産材と合法木材の連携（2002～）
33	**産官学が連携した「高齢研」と「木環研」**　～居住環境、炭素固定、経済効果等の検証（2005～）
34	**大型化・効率化路線への対応** ～「水平連携」による６つの地域製材ネットワークグループ（2006～）
35	**3.11 東日本大震災余話**　～放射能汚染の風評被害と安全証明（2011～）

1　「静岡県木材史」の発刊 ～ 次代の人達への贈りもの（1968）

今回、創立 70 周年誌を取りまとめるにあたり、1968(昭和 43)年 6 月、本会が明治百年を記念して出版した「静岡県木材史」に改めて目を通した。

本書は、アジア初開催となった「東京オリンピック」の翌年、「木材産業の発展の資料を散逸させない、ご指導願った諸先輩に報いるため、次代の人達への贈りものとするため」との新間伊津平会長の強い思いを受け、1965(昭和 40)年 6 月 24 日、当時の神谷俊郎専務理事から電話依頼を受けたと編集委員長兼執筆責任者である静岡大学農学部兼岩芳夫教授の記録にある。

その後、上梓まで丸 3 年間、県木連関係者を中心に、静岡大学、県林務部等で構成された編集委員会の熱意は「学問的にも余り恥ずかしくないものにしたい」、「校正が進んだ昭和 42 年の秋からは県木連の職員になった気持ちで、気軽に木連に足を運び」との兼岩芳夫教授の「あとがき」にも色濃くあらわれている。

太古から江戸時代の林業の発展、明治前期の製材工業勃興、明治中期から大正時代の鉄道の発達と流通革命、製材工業の発展、木材業者の組織化、木材パルプ工業の発展、昭和のなかでも戦時統制時代の業界組織と規格、価格、配給など、今では及びもつかない激動期を経て、米材、北洋材の市場支配時代の到来まで脈々と続く本県の産業発達史となっている。B5 判 800 頁余の上製本は、発刊にあたり西村直己 農林水産大臣、竹山祐太郎県知事、片山正英 林野庁長官などがお祝いの言葉を寄せており、学術的な価値だけでなく、当時の本県木材産業の位置付けを伺い知る貴重な資料ともなっている。

当時、非売品として業界関係者等に配布され、一時期神田の古書街で高額販売されたという本書は著名な歴史物作家にも貸し出し、未だ返還されていないというエピソードもある大作である。半世紀の時を経た今でも、単位木協や会員会社の書庫の片隅に密やかに眠っているのかもしれない。

静岡県木材史の目次（抜粋）

第一章：太古より江戸時代前まで（登呂遺跡にみられる木材、奈良時代以降）
第二章：江戸時代の展開過程（林野制度と林業の発展、天竜川地帯の木材流通の発展、大井川地帯における木材業の発展、駿府・清水港その他の木材業など）
第三章：明治時代前期（明治初年の諸制度の変革、木材市場の形成と官林の伐木事業）
第四章：明治中期より大正初期まで（製材工業地帯の確立、木材輸送と木材流通、木材業者の組織化、木材パルプ工業の発祥）
第五章：第一次大戦より木材等制まで（米材・北洋材の輸移入と製材業、材木商同業組合の各種対策）
第六章：木材統制時代（社会情勢と統制時代、戦前の統制、戦時統制、木材統制の変遷、戦後統制解除まで）
第七章：最近の木材業界の動向（戦後経済体制と木材業界、戦後の外材輸入、製材業、静岡県木材協同組合連合会と業界の活動、木材流通機構の変動ほか）

➤**関連書籍：**静岡県木材史（昭和 43 年 6 月 16 日発行）静岡県木材協同組合連合会

2 受け継がれてきた３つの慶弔催事（1959~）

～ 先達に想いを寄せ、協同組合の精神で

70 周年にあたり、木材業界の伝統的な慶事と弔事の歩みを記録に留めたい。

業界功労者に対する「物故者慰霊祭」と業界の振興発展に幅広く貢献された各賞の受章者、白寿・米寿・喜寿など業界の長寿者をお祝いする「受章者祝賀会」、「寿木会」（ことぶきかい）である。

1959(昭和 34)年度から県木連・単位木協の役員、組合員の物故者に係る「合同慰霊祭」が 7 年ごとに 9 回連続開催されている。現在では、一部の単位木協で周年事業として実施している事例もあるが、協同組合精神に基づき、対象を県下一円に広げて開始された催事である。

▲第 1 回 物故者慰霊祭（昭和 34 年 11 月 10 日、袋井市・可睡斎）

物故者慰霊祭の歩み

回数	開催日・会場	慰霊者数	祭主(会長)	備考
第 1 回	昭和 34 年 11 月 10 日　袋井市・可睡斎	－	新間伊津平	詳細記録なし
2	昭和 41 年 3 月 13 日　島田市・静居寺	35 霊位	〃	
3	昭和 48 年 10 月 21 日　静岡市・臨済寺	64	〃	
4	昭和 55 年 10 月 26 日　〃	48	川口清俊	
5	昭和 62 年 11 月 1 日　〃	57	〃	
6	平成 6 年 11 月 13 日　島田市・静居寺	57	髙橋孝三	
7	平成 13 年 10 月 28 日　静岡市・臨済寺	49	新間溥二	
8	平成 20 年 11 月 2 日　〃	11	杉山陽一	
9	平成 27 年 11 月 8 日　〃	33	内山　弘	

注）原則 7 年ごとに開催。

昭和 40 年代初頭においては、受賞者に対する祝賀会はごく一部の組合で仕出し料理を持ち込む簡素な祝宴があったものの未開催組合も多かったため、年末に全県一本で開催することとなり今日まで継続して開催されている。

▲平成 5 年度 受章者祝賀会（平成 5 年 12 月 22 日、静岡市・日興会館）

一方、1965(昭和 40)年に開始された長寿者を祝う「寿木会」は、当初は組合長会議を併催し現役役員と業界長老の交流の場として、毎年正月に 1 泊 2 日で各地の温泉場で開催されてきた。2000(平成 12)年度からは「受章者祝賀会」との合同開催となり、今日まで 56 回連続開催されている。これまでに白寿 5 名、米寿 65 名、喜寿 182 名の業界長寿者に対し、恒例の記念品「正絹ちゃんちゃんこ」が贈られている。

以上、慶弔に係る 3 つの催事は、いずれも新間伊津平会長時代に開始されたものだが、尊厳をもって先達に接し、長幼の序を重んじる本県木材業界の良き伝統が半世紀余にわたり脈々と息づいている。

▲第 2 回 寿木会（昭和 41 年 1 月 20 日、田方郡大仁町・大仁ホテル）

寿木会（ことぶきかい）規約

1．名　称　この会は、「寿木会（ことぶきかい)」と称する。

2．目　的　この会は、会員相互の親睦を深めることを目的とする。

3．会　員　会員は、以下のとおりとする。

① 静岡県木材協同組合連合会（以下、「静岡県木連」という。）の現役員（理事・監事）ならびに役員経験者とする。

② 静岡県木連傘下の木材協同組合等の現役員および役員経験者、ならびに組合員および組合員であった者で、加入を希望する者とする。

4．行　事　① 白寿（数え年 99 歳)、米寿（数え年 88 歳)、喜寿（数え年 77 歳）のお祝いを行う。

② ①の寿福者のうち、「過去 3 回以上」の出席者の方に記念品を贈る。

5．会　計　会費は、出席者より徴収する。

6．事務局　事務局は、静岡県木連に置く。

7．その他　この規約にないものは、理事会で決定する。

寿木会（ことぶきかい）の歩み

回数・年度	会　場	回数・年度	会　場
第 1 回・昭和 40 年度	熱海市・海山荘	第 29 回・平成 5 年度	修善寺町・新井旅館
2　・　41	大仁町・大仁ホテル	30　・　6	熱海市・金城館
3　・　42	東伊豆町・熱川ホテル	31　・　7	熱海市・南明ホテル
4　・　43	天城湯ヶ島町・落合楼	32　・　8	伊東市・ホテルラヴィエ川良
5　・　44	下田市・下田ホテル	33　・　9	熱海市・金城館
6　・　45	熱海市・富士屋ホテル	34　・　10	〃
7　・　46	伊豆長岡町・白石館	35　・　11	〃
8　・　47	伊東市・ハトヤ	36　・　12	〃
9　・　48	修善寺町・菊屋	37　・　12	静岡市・中島屋グランドホテル
10　・　49	湯河原町・ホテル東横	38　・　13	〃
11　・　50	熱海市・見晴館	39　・　14	〃
12　・　51	伊東市・えびな	40　・　15	〃
13　・　52	熱海市・水葉亭	41　・　16	〃
14　・　53	伊豆長岡町・ホテルサンバレー	42　・　17	〃
15　・　54	伊東市・鈴幸ホテル	43　・　18	〃
16　・　55	浜松市・舘山寺レイクホテル	44　・　19	〃
17　・　56	熱海市・新かど旅館	45　・　20	〃
18　・　57	伊東市・大和館	46　・　21	〃
19　・　58	伊豆長岡町・八景園	47　・　22	〃
20　・　59	伊東市・ホテルニュー東海	48　・　23	〃
21　・　60	修善寺町・鶺鴒荘	49　・　24	〃
22　・　61	熱海市・大月ホテル	50　・　25	〃
23　・　62	伊東市・大和館	51　・　26	〃
24　・　63	〃	52　・　27	〃
25　・平成元年度	〃	53　・　28	〃
26　・　2	焼津市・松風閣	54　・　29	〃
27　・　3	伊東市・大和館	55　・　30	〃
28　・　4	熱海市・水葉亭	56　・令和元年度	〃

注）第 37 回・平成 12 年度より、受章者祝賀会との合同開催となる。

3　２つの全国団体 ～ 全木連と全木協連とは？（1954~）

全木連(一般社団法人全国木材組合連合会)と全木協連(全国木材協同組合連合会)、何故２つ、その違いは？２つの全国団体について、折に触れ役員や会員から受ける質問である。

下表に令和元年度における両団体の概要をまとめたが、詰まるところ公益法人の全木連は関連業界横断的なロビー団体、全木協連は中小企業協同組合の全国組織ということになろう。これまで、本会からは稲勝正太郎、新間伊津平、川口清俊の３氏が両団体の会長に就任している。組合活動が年々厳しさを増すなか、組織の求心力を高めるためには、存立の原点たる設立目的や活動状況を対外的にわかりやすく説明、発信することが求められる。

▲木材産業シンボルマーク
（全木連創立 50 周年記念事業）

なお、1975(昭和 50)年、全木連の第２代会長となった稲勝正太郎氏の提唱で全国木材産業政治連盟(全木政連)が設立されている。

区　分	全木連：(一社) 全国木材組合連合会	全木協連：全国木材協同組合連合会
１．準 拠 法	一般社団法人及び一般財団法人に関する法律	中小企業等協同組合法
２．設　　立	1954（昭和 29）年３月 10 日	1961（昭和 36）年９月 12 日
３．会　　員	都道府県木連 47、業種別会員 17、賛助会員 20	道府県会員 34、地域会員 5、賛助会員 5
４．主要事業	①全国の木材関係業者間の要望、②意見、情報の収集、調整、政策の立案、③各方面への陳情、建議、④各種調査・研究など	①製材の共同取引事業、②国有林材受託販売事業、③福利厚生事業など
５．特　　色	都道府県木連会員に加え、業種別会員（木材チップ、木材防腐、集成材、フローリング、バーク堆肥等)、賛助会員（合板、木材輸入、製紙、林災防等）を加えた木材関連産業のロビー団体。	都道府県木連を主構成員とする中小企業協同組合の全国組織。
６．歴代会長	初代：松浦周太郎・北海道 （昭和 29 年３月～昭和 49 年 10 月） **２代：稲勝正太郎・静岡県** （昭和 49 年 10 月～昭和 52 年 11 月） ３代：竹田平八・大阪府 （昭和 53 年２月～昭和 59 年１月） ４代：緑川大二郎・青森県 （昭和 59 年３月～平成２年５月） **５代：川口清俊・静岡県** （平成２年５月～平成５年 11 月） ６代：鈴木正治・愛知県 （平成５年 11 月～平成７年３月） ７代：亀井清蔵・東京都 （平成７年３月～平成８年５月） ８代：久我一郎・大阪府 （平成８年５月～平成 16 年５月） ９代：庄司橙太郎・東京都 （平成 16 年５月～平成 20 年５月） 10 代：並木瑛夫・千葉県 （平成 20 年５月～平成 24 年５月） 11 代：吉条良明・東京都 （平成 24 年５月～平成 30 年５月） 12 代：鈴木和雄・愛知県 （平成 30 年５月～　）	初代：松浦周太郎・北海道 （昭和 36 年９月～昭和 49 年５月） **２代：新間伊津平・静岡県** （昭和 49 年５月～昭和 57 年５月） ３代：亀井初男・東京都 （昭和 57 年５月～昭和 62 年５月） **４代：川口清俊・静岡県** （昭和 62 年５月～平成２年５月） ５代：渡邊 茂・東京都 （平成２年５月～平成５年 11 月） ６代：古本琢磨・宮崎県 （平成５年 11 月～平成 11 年５月） ７代：庄司橙太郎・東京都 （平成 11 年５月～平成 16 年５月） ８代：並木瑛夫・千葉県 （平成 16 年５月～平成 20 年５月） ９代：吉条良明・東京都 （平成 20 年５月～平成 24 年５月） 10 代：坂東正一郎・埼玉県 （平成 24 年５月～平成 30 年５月） 11 代：松原正和・北海道 （平成 30 年５月～　）

注）資料：全木連 50 年史（平成 15 年 12 月)、全木協連 35 年の歩み（平成８年 10 月）ほか

4 JAS としずおか優良木材

～木材の品質規格、オールジャパンと地域限定（1950～）

戦後の混乱による物資不足や模造食品の横行による健康被害等の頻発を背景に、1950(昭和 25)年農林物資規格法(JAS 法)が制定され、農林物資の品質改善や取引の公正化を目的として、農林水産大臣が制定した日本農林規格による検査に合格した製品に JAS マークを付けることを認める JAS 規格制度が発足し、以後、社会情勢等を鑑みて、製材等についても順次制度の改正及び見直しが行われ現在に至っている。

1964(昭和 39)年、農林省は製材業の実態調査と改善事項をとりまとめ、「日本農林規格と正量取引」に関し、尺貫法の読み替え表示としてのメートル法の普及、標準寸法の現状と部切れ製品の一般流通化を指摘している。これを踏まえ、全木連では翌 1965(昭和 40)年 JAS 認定工場制度の実施に着手し、全木連及び各都道府県木連が格付け機関となり、JAS 製品の生産及び流通の促進を決定した。

1970(昭和 45)年には、消費者保護基本法の趣旨にそって日本農林規格制度と品質表示制度を柱とした「農林物資の規格化及び品質表示の適正化に関する法律」として改正され、「JAS 認定工場制度」が確立した。

▲第 1 回静岡県木材ショー（昭和 44 年度）「JAS 木製品展示会」より

▲ジャパンホームショー2018（平成 30 年度）「JAS 構造材の展示会」より

その後、1983(昭和 58)年には政府の市場開放促進政策により、外国製造業者にも承認・認定工場制度が開放され、1999(平成 11)年には、これまでの認定工場制度が大幅に改正され、2000(平成 12)年以降全木連では新たに「登録格付機関」、「登録認定機関」の認可取得、ならびに「第三者検査機関」の設立が進められた。この間、県内においては 1993(平成 5) 年の新 JAS 推進委員会(村松俊介委員長)以降継続的に認定・運用経費、JAS 材発注の現況、費用対効果等、新制度への対応が幅広く検討された。

一連の改正により、既存認定工場は 3 年間の経過措置後は新基準により改めて認定を受けることが必要となり、自己検査による格付け工場(A タイプ工場)と検査を外部の第三者検査機関に依頼し、その結果に基づいて判定・格付を行う工場(B タイプ工場)に区分されることとなった。

大改正により認定工場数は全国的にも激減し、県内においては 1971(昭和 46)年度のピーク時、旧 JAS 制度において一般製材 JAS 認定工場が全国屈指の 255 工場立地し、検査員を 23 名配置していたが、現在では新制度による B タイプ認定工場が 6 となっている。

その後、2006(平成 18)年には全木連に変わる認証機関として一般社団法人全国木材検査・研究協会(全木検)が設立され、2017(平成 29)年改正 JAS 法のもと関連業務が推進されている。

一方、性能化時代における優良地域材の活用促進を目的とし、本県独自の地域認証制度として 2001(平成 13)年度に「しずおか優良木材認証制度」がスタートした。創設時の担い手は 6 認定工場と県森連、県木連の支援団体からなる「しずおか優良木材供給センター」であった。

当初、県からは「センター事務局は県木連で」との打診があり、これを踏まえ正副会長会議等の内部協議を踏まえ、県ならびに友好団体である静岡県森林組合連合会(県森連)とも検討を重ねた結果、最終的に県森連に事務局をお願いすることで合意した。

供給センター草創期から今日に至るまで、県森林・林業研究センター等地域研究機関のご教示を仰ぎながら、定期検査における現地指導、木材乾燥等の品質管理研修会、先進地視察研修等を通して、認定工場の資質向上に努めるとともに、住まい博、暮らし博など地域イベントへの出展等、普及啓発活動を積極的に推進した。センター設立以来、榛村純一、中谷多加二両会長、柳川真佐明代表監事が中心となり、全認定工場の結束と県森連、県木連事務局の相互連携のもと、今日まで 20 年間にわたり林材の連携体制で円滑な業務運営を継続している。その結果、令和元年度末の認定工場は 24 工場、優良木材の出荷総量は 11,000 ㎥余まで拡大し、「住んでよし しずおか木の家推進事業」をはじめ、高品質な県産材製品を求める幅広い地域需要に応えている。

▲左から：品質管理研修会の開催、認定工場の定期検査、PR 展示会「暮らし博 2019」への出展

現在の林産物規格は、国家規格の①JAS (製材・集成材・単板積層材・合板等)と②JIS (繊維板・パーティクルボード・木質セメント板)、日本住宅・木材技術センターによる③AQ (製材・集成材・合板等の木材・その他の木質材料等を用いて製造され品質性能評価基準が定められた品目に該当する製品)、④各都道府県等の認証制度（しずおか優良木材認証制度等)の 4 区分となる。

これらの品質規格は、生産者が使用者の信頼を得るため自主的に定めて運用することが基本であり、オールジャパンの JAS 材であれ、しずおかローカルの地域認証材であれ、しっかりとした品質保証と運用管理ができているか、そのための基準は妥当かを再検証する必要がある。原点である「誰のための認証材」なのかに立ち返り、確かな品質で生産供給を続け、JAS 製品、しずおか優良木材が信頼の証となるよう不断の努力が求められる。

5 国産材時代を支える ～ 林災防と林技協の歩み（1964～）

本編では、本会にて事務を受託している林業・木材製造業労働災害防止協会静岡県支部（林災防）と、静岡県林業技術者協会（林技協）の設立から今日に至る歩みを記録に留めたい。

労働災害の増加と、1962(昭和 37)年 4 月より林業が労働安全衛生規則（安衛則）の全面適用となり、1964(昭和 39)年 6 月 25 日「労働災害防止団体等に関する法律」が制定され、これを受け林業界では関連団体から労災防止全国団体の設立が要請された。全国団体の設立にあわせ、本県では県木連が中心となって地域組織の設立に動き、以前より労災防止活動を行っていた「静岡県林業労働災害対策協議会」を母体とし、1964(昭和 39)年 10 月 31 日「静岡県林業労働災害防止協会静岡県支部」（新間伊津平支部長）が設立された。

1983(昭和 58)年 1 月からは現在の「林業・木材製造業労働災害防止協会」に名称を変更し、歴代の県木連会長が支部長を務め、静岡労働局長登録教習機関としての「技能講習」をはじめ、機械集材装置の運転業務、伐木等の業務、走行集材機械の運転業務、架線集材機械の運転業務等に係る「特別教育」、刈払機取扱従事者、荷役はい作業従事者、造林作業指揮者に対する「安全衛生教育」など幅広い教育研修事業を実施している。

この間、2010(平成 22 年)からの民主党政権下、厚生労働省の指導に基づいた林災防本部改革の一環で進められた定款と組織規程の変更に伴い、2015(平成 27)年の第 51 回通常総会において本県支部の規程、計画等が変更された。これにより本部と支部の決算の一体化等、相互のあり方が大きく変更され、本県では平成 28 年度より、運営組織としての「林災防静岡県支部活動支援協議会」と改称し現在に至っている。

また、2015(平成 27)年 10 月には、静岡市において全国の林材関係者 1,000 名余の参加を得て「第 52 回全国林材業労働災害防止大会」が開催され、開催県支部を挙げて大会の運営業務に尽力している。

▲安全の標識「緑十字」

一方、林技協も 1962(昭和 37)年の安衛則の全面適用により、「架線技師」の国家資格化が実施されることとなり、これに対応する形で同年「全国集運材架線技師協会」が設立され、本県では同年 7 月、地域組織として「静岡県集運材架線技師協会」が設立された。同協会は、1971(昭和 46)年度に「静岡県林業架線技師協会」と名称変更したが、翌 1972(昭和 47)年の安衛則改正により「林業架線技師」は廃止され、現在の「林業架線作業主任者」に変更となったことから協会の役割が薄れ、各県ならびに全国協会は解散することとなった。かかる状況下、1977(昭和 52)年度、本県協会のみ「静岡県林業技術者協会」として存続を決定し、伐木造材作業における安全作業方法の確実な取得と作業技術の向上を図るため、静岡県の支援と林災防との連携により、今日まで四半世紀余にわたり「静岡県伐木造材技術競技会」、「切り出し運搬安全技術講習会」を連続開催するなど、全国無二の教育・訓練を通じて現場技術の向上と労働の安全に大きく貢献している。

今後、林業界が「主伐再造林」へと移行する中、両団体には労災の防止と現場技術者の育成の両面から「国産材時代」を現場から支えてゆくことが期待される。

● 林業・木材製造業労働災害防止協会静岡県支部（林災防）の活動から

▲平成 27 年度 第 52 回全国林材業労働災害防止大会の式典、 内山 弘支部長「開会挨拶」（静岡市 グランシップ）

▲平成 28 年度 機械集材装置運転特別教育、平成 27 年度 伐木等業務特別教育（共に浜松市）

● 静岡県林業技術者協会（林技協）の活動から

▲平成 20 年度 架線試験準備講習会（静岡市）

平成 20 年度 第 15 回伐木造材技術競技会（島田市）

▲伐木造材技術競技会　平成 27 年度 第 22 回、平成 28 年度 第 23 回 （共に富士宮市）

● 静岡県林業技術者協会（林技協）の歴代会長

就任年度	会 長（地区）
1962(昭和 37)～1996(平成 8)	天野 政五郎（天竜）
1997(平成 9)～2002(平成 14)	栗澤 和市（天竜）
2003(平成 15)～2018(平成 30)	片平 成行（清庵）
2019(平成 31)～	今井 保隆（天竜）

6 高度成長期、住宅産業への挑戦 ～「木質パネル量産住宅」の残したもの（1965～）

アジア初の東京五輪大会が開催された 1964(昭和 39)年は、我が国が高度成長の真っ只中にあった。当時の住宅需要の不足緩和に向け、社団法人木質資源利用合理化推進本部が取りまとめた「木造プレハブ住宅の推進に関する試案」に基づき、プレハブ建築に関する流通機構合理化が検討され、公募形式でプレハブ工法による木造住宅の設計競技が開催された。

この時代背景の中、本県では 1965、1966(昭和 40、41)年度の 2 年間、静岡県林材青壮年団体連合会（静岡県木材青壮年団体連合会の前身、滝浪 進会長）が静岡県の支援を得て「木質量産規格住宅」の研究会を立ち上げ、首都圏における既存プレハブ住宅の見学会、関係者へのヒヤリング、県内各地におけるモデル住宅の建設と展示、技術改良を進めた。

限られた手元資料によれば、住宅は 3 ～4 人家族向けの 12A 型平屋建て（12 坪）、高級住宅 15A 型平屋建て（15 坪）となっており、基本構造は現在の軸組と大きく変わらず、ヒノキ、ベイツガ等を使用、内装材は清水港木材団地内の清水木材乾燥協同組合で全量人工乾燥された。そのほかには、内装ラスボードパネル、2 間梁へのトラスの採用、大波スレート屋根、軒下の平スレート張り、基礎は実用新案を出願中の特殊ブロックを使用するなど、当時の住宅事情を色濃く映したものとなっている。

これと併行してこの事業化に向け、1966(昭和 41)年 7 月、県木連の有志会員により木質量産住宅の部材加工、セールス活動と PR 等を行う「静岡県木産住宅協同組合」が設立された。今でこそ当たり前の川下戦略＝住宅産業への進出だが、今を時めくプレハブ各社が安かろう、悪かろうとマスコミ批判の渦中にあった草創期ともなれば、半世紀前に本県木材業界が着手した「木質パネル量産住宅」の先見性は光る。

既に事業の中核を担われた青壮年会員の大半は故人となられたが、大きな希望を抱いてスタートした組合事業は、残念ながら約 2 年間で頓挫した。しかしその後、研究会関係者の中から住宅産業へ転進され成功を納めた事例もあり、道標として大きな波及効果はあったようである。

いずれにしても、今から半世紀余り前の先覚者たちの経験は、共同事業における着手時期、人材配置、組織選定等の大切さと難しさを今日に教えてくれる温故知新のひとつである。

▲住宅近代化展における 15A 型のモデル展示（昭和 41 年）

◀「15A 型展示住宅」を視察する斎藤寿夫県知事（上）と東京大学・村松貞次郎助教授（下）（昭和 41 年 4 月）

7　インドネシアの森林開発 ～ SICOR・本県木材業界史の一断面（1970～1980）

インドネシアの森林開発を行い、この森林資源を有効活用することを目的とし、県と県内木材関連業界が出資した県策会社があったことをご存じだろうか？

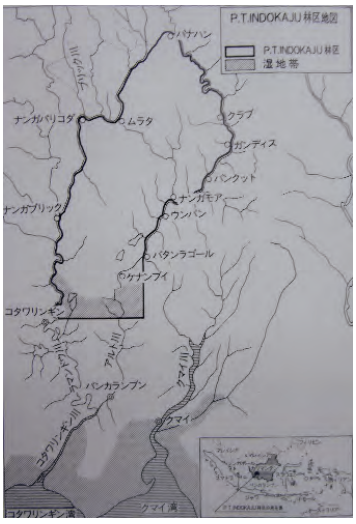
1970(昭和 45)年 8 月、長期的な視野から南洋材資源の確保を図るため、本県の木材業界の代表者がインドネシアに調査団を派遣したことを契機として、雄大な構想の開発プロジェクトはスタートした。

会社設立から既に半世紀近く、会社清算から 30 年余が経過し、プロジェクトの中心的な役割を果たされた役員の方々は他界され、当時を知る術は脚注図書と数少ない業界関係者や県木連から県策会社に出向した担当職員の記憶に限られるが、本県の木材産業史の 1 頁として記録に留めたい。

静岡県とインドネシア共和国との経済協力、友好親善、森林資源開発輸入等を命題とした竹山裕太郎県知事の構想を受けて、県内の木材・合板・紙パルプ等木材関連産業が結束し、1972(昭和 47)年 8 月 13 日、県と県内関連業界が各々1 億円を出資する静岡県インドネシア株式会社（英文商号 SHIZUOKA　INDONESIA　CORPORATION、略称 SICOR）が設立された。設立総会の閉会あいさつで柴田竹治監査役が「社名の略称は韻を踏むと英語の Sea call（海が呼ぶ）に通じ、海外に雄飛しようとする当社にふさわしい」と希望に満ちたスタートを切った。

その翌年、1973(昭和 48)年秋の石油危機に端を発した長期にわたる景気低迷と、1974(昭和 49)年 5 月にインドネシア政府が発表した「資源ナショナリズム政策」に基づく外資合弁企業に対する「森林伐採権発給停止措置」等、思わぬアクシデントが相次ぎ、プロジェクトの推進は多難を極めた。

1976(昭和 51)年 6 月、紆余曲折を経て森林伐採権を有する現地法人 P.T.インドカユ、伊藤忠商事㈱、伊藤忠林業㈱、SICOR の 4 社の共同出資による合弁会社 P.T.アルト・ブリック・ティンバーカンパニー・インドネシア（略称 ABTC、カリマンタン島林区の両側を流れる 2 つの川の名前に因んで命名）が設立され、1977(昭和 52)年 1 月、インドネシア政府から現地法人に森林伐採権が交付された。その後、1978(昭和 53)年 5 月、ABTC の外国投資申請書は BKPM(インドネシア政府投資調整委員会)で認可された。



▲森林開発の対象林区

1980(昭和 55)年 9 月 14 日、中部カリマンタンの総面積 18 万 ha の林区から伐採された南洋材原木 6,700 ㎥を満載した待望の第一船が清水港に入港した。

多事多難の 10 年余 SICOR の社歴は、資源ナショナリズムと 2 回のオイルショックを契機に大きく揺れ動いた我が国の社会経済の縮図ともいえよう。

また、県後継者養成課からの要請を受け、静岡県南方懇話会、SICOR を窓口として 1972(昭和 47)年 7 月から 1980(昭和 55)年 3 月まで 8 期にわたり、県内の木材関連産業において、インドネシア林野庁、林業公社等の若手・中堅の技術研修生を計 25 名受け入れるなどの国際貢献を果たしている。

静岡県インドネシア株式会社の役員等名簿（設立時）

（顧問・相談役）

顧　問　竹山祐太郎（静岡県知事）

相談役　平野繁太郎（静岡銀行会長）、増井慶太郎（静岡県中小企業団体中央会長）、
三浦辰雄（元 林野庁長官、元 カリマンタン森林開発協力㈱社長）

（役　員）

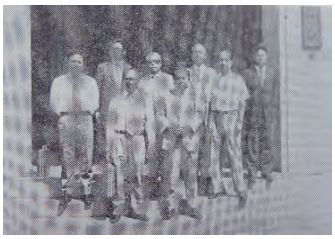
代表取締役会長　内山信一、代表取締役社長　新間伊津平、代表取締役副社長　坂上貴信

取締役　斉藤了英、鈴木与平、荒井彦宗、野田力三、川口清俊、黒田善也、稲垣良平、
小沢喜太郎

監査役　川口康二、柴田竹治、磯谷幸一郎

▲ジャングル踏査・林区の森林調査
左：昭和 47 年雨期調査、右：昭和 48 年乾期調査

▲竹山知事を表敬訪問したインドネシア林野庁の
スジャロウ長官一行（昭和 47 年 6 月、静岡県庁）



▲インドネシア政府関係者等の来静／左：林野庁市場局長(昭和 47 年 9 月・清水港)、中：林業公社幹部(昭和 50 年 9 月・静岡県庁)、右：在日大使館農務官(昭和 54 年 10 月・田子の浦港)

▲ABTC 株主総会に先立ち、スジャロウ長官を表敬訪問した SICOR 役員
（昭和 54 年 11 月、ジャカルタ・インドネシア林野庁）

▲待望の第一船入港を伝える報道

➤関連図書：インドネシアへの道（昭和 54 年 11 月）静岡県インドネシア㈱

8 なぜ？ 全国唯一の県庁内事務所（1974～）

～ 木造２階建て木材会館から県庁西館９階へ

業界団体である県木連の事務所がなぜ県庁内にあるのか？

年代を問わず組合員から頻繁にいただくご質問である。確かに 47 都道府県木連のなかで、唯一無二の県庁舎内の事務所となっている。残念ながら事務所移転を経て関連資料が散逸しており、本稿では本会の残余資料、行政資料と新間伊津平、川口清俊両会長や同世代役員諸氏から直接お伺いしたことに基づき、過去を紐解けば以下の経過となっている。

戦後、本会の旧事務所は市内屋形町 24 の戦災焼け跡に簡素な事務所があった。木材統制解除直後、1947(昭和 22)年 7 月、本会の前身組織である静岡県木材林産協会（福島庄太郎会長）の総会決議に基づき大成建設㈱による突貫工事が敢行され、翌 23 年 7 月、現在の静岡森林管理署が立地する駿府町 1-117 の県有地を借り上げ、木造瓦葺 2 階建(175 坪、総工費 225 万円)の「静岡県木材会館」が完成した。

以来 25 年間にわたり同会館は、本県木材業界の拠り所として、戦後、または台風災害の復興材の供給に貢献するなど社会・経済激動期に対処しつつ、本県の木材産業の発展に大きな足跡を残してきた。その後、県の総合開発、静岡市の城内整備計画に関連し、本会事務所の敷地が静岡県と静岡市の間で交換され、県が県庁西館 10 階建の高層建築を計画し、その一部に入居するよう本会(新間伊津平会長)と静岡県森林組合連合会(内山信一会長)、静岡県土地改良事業団体連合会(西村直己会長)の 3 団体に対し、竹山祐太郎県知事から勧奨があった。

当時の業界人にはオガ粉のついた作業服で気軽に立ち寄れる木材会館から、県庁内に事務所を構えることに相当抵抗感があったようで、組合長会議では再三にわたり激しい意見が交わされたという。粘り強く組合長会議で協議を重ねた結果、傘下単位木協の協力を得て 1974(昭和 49)年 3 月 23 日、取得価格 34,558,000 円にて県庁西館 9 階に 338.88 ㎡の区分所有者として他の 2 団体とともに入居することとなった。その後、1985(昭和 60)年 2 月に 51.68 ㎡を静岡県山林種苗協同組合連合会(県苗連)に部分譲渡し、2005(平成 17) 年 4 月から静岡県産業廃棄物協会(産廃協会)に対して 117.76 ㎡を賃貸し、今日に至っている。

この間、築後 30 年の 2004(平成 16)年 7 月から 2005(平成 17)年 12 月にわたり県庁西館の「大規模耐震補強工事」が総額 23 億円余で実施された。県から本会に対し 43,419,000 円の工事費負担金が提示されたため、新間溥二、杉山陽一の両会長が中心となって理事会において対応協議を重ね、県側とも交渉を続けた結果、10 年間の分割納付とすることで合意した。平成 17 年度に手元預金、顕章基金からの借入れ、全木協連出資金の半額減資、小会議室 51.68 ㎡を県に売却する等で 1,700 万円余を一括支払いし、残額は返済計画通り 2014(平成 26)年度末には完済することができた。以上が今日、県木連が県庁舎内に事務所を構えるに至った一連の経過概要である。

▲静岡県木材会館の全景（昭和 40 年代）

▲現在の事務所がある県庁西館の全景・奥、手前は本館・議会棟（令和２年）

★関連資料：県木連の総会資料、静岡県木材史、県庁西館の整備記録

9 県内 PR 展示会も時代と共に ～ 木材ショー、住宅展・住まい博、暮らし博へ（1970～1973、1982～）

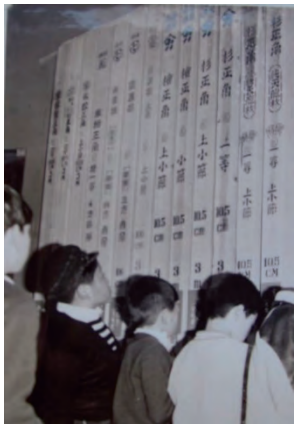
新技術・新製品開発と PR 活動は、産業を拡大発展させる両輪ともいわれる。いずれも、中小企業、中間素材を取り扱う木材業界にとっては、最も苦手な分野でもある。本編では木材業界の PR イベントの軌跡について記録しておきたい。PR の端緒は、昭和 40 年代に遡る。1970(昭和 45)年、静岡県と製材・合板等の検査機関、本会等関連団体の共催で「くらしを創る」をテーマとし静岡市産業会館（現在の静岡市役所裏の青葉イベント広場に立地した 4 階建て)を全館貸し切って「静岡県木材ショー」が開催された。本会としては併催された「第 1 回 JAS 木製品展示会」に会員企業と連携出展し、JAS 製材品をはじめ、集成材、フローリング、バーク堆肥、オガライト等の PR を行った。

この展示会は、毎年多くの市民が来場するなか、5 年間にわたり盛会裏に継続開催され、いざなぎ景気から第一次オイルショックを挟んだ景気転換期における木材 PR に大きな足跡を残した。

● 木材ショーの開催経過

年度	催事名・開期・会場・来場者
昭和 44	第 1 回 静岡県木材ショー（JAS 木製品展示会） （昭和 45 年 1 月 23 日~27 日、静岡市・静岡市産業会館）
45	第 2 回 静岡県木材ショー（　〃　） （昭和 46 年 3 月 5 日~9 日、静岡市・静岡市産業会館）
46	第 3 回 静岡県木材ショー（　〃　） （昭和 47 年 2 月 9 日~13 日、静岡市・静岡市産業会館）
47	第 4 回 静岡県木材ショー（　〃　） （昭和 48 年 2 月 14 日~18 日、静岡市・静岡市産業会館、来場者 13,601 名） （昭和 48 年 3 月 2 日~21 日、浜松市・西武百貨店 浜松店、来場者 46,000 名）
48	第 5 回 静岡県木材ショー（大自然のみどりと静岡木材展） （昭和 49 年 1 月 24 日~29 日、静岡市・松坂屋百貨店）

注）第 1~3 回、第 5 回の入場者数の記録なし。



▲第 1 回静岡県木材ショー（静岡市産業会館）▶

一方、県内の建築関連イベントは、東京オリンピック後の景気高揚感の中、1965(昭和 40)年に「第 1 回住宅近代化展」として静岡市産業会館でスタートした。同催事は第 6 回から「住宅展」、第 8 回から「静岡県住宅展」に催事名を変更し、本会は全県木材 PR が開始された 1982(昭

和 57)年、浜松総合産業展示館における「第 18 回静岡県住宅展」が初の単独出展であった。以後、開催会場を沼津市、静岡市と持ち回り 1987(昭和 62)年の第 23 回催事より住宅展実行委員会と SBS グループとの共催による「静岡県住宅展・住まい博」に名称を変更し、時代の変化に即した展示企画と運営により 2016(平成 28)年の第 52 回まで半世紀余にわたり継続開催され、多くの市民参加のもと広範で有益な住情報が発信された。

この間、本会は当初の単独出展を経て、県建築部局主管のもと建築士会、集成材、合板等の関連団体と連携したテーマゾーンの共同出展に連続参画し、木造建築における適材適所、木材の的確な活用と位置づけを強く意識した展示手法を修得することができた。なかでも、1994(平成 6)年の第 30 回展示会では製材品、集成材、合板等の木質建材と融合した大型木造フレームのテーマ展示を行い、次いで 1995(平成 7)年 10 月の第 31 回展示会では、同年 1 月の阪神大震災で大きなダメージを受けた木造住宅の信頼性回復に向け、「考えよう 安全とやすらぎの住まい」を主題とするテーマゾーンに共同出展した。静岡大学と連携して本会が実施した「木材 強さのヒミツ」構造材破壊試験は、マスコミ取材のなか来場者の大きな関心を集めた。

▲初の単独出展「住宅相談会」
（浜松市・第 18 回静岡県住宅展）

▲適材適所、木造大型フレームのテーマゾーン
（静岡市・第 30 回静岡県住宅展）

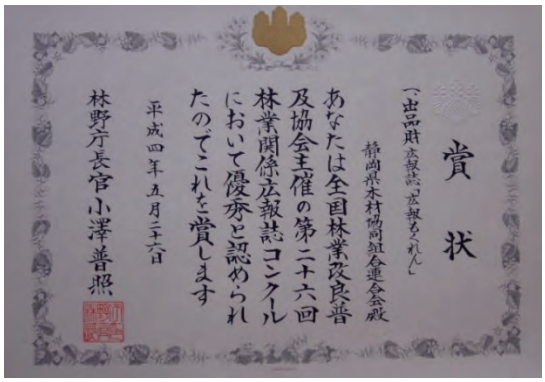
▲震災直後のテーマゾーンは「安全とやすらぎ」を PR(左)、「強さのヒミツ」検証試験(左)
（静岡市・第 31 回静岡県住宅展）

その後、展示会名が「静岡県住まい博」と変更されるなか、2001(平成 13)年度、優良県産材の安定供給をはかるため「しずおか優良木材供給センター」が設立されたことを契機とし、本会はこの認証センターグループの一員として県森連、認証工場との共同出展に移行することとなった。同展示会では、認証制度と県産材住宅の助成制度、JAS 製材、合法木材等の PR を継続実施し、2016(平成 28)年の住まい博・住宅展が終了後、2017(平成 29)年度からは SBS グループ主催の「暮らし博」への共同出展を継続している。この間、2003~2009(平成 15~21)年度の 7 年間は、県の環境森林部が主管した「しずおか環境・森林フェア」にも同様の体制で共同出展している。

１０　団体報も時代に即し（1973~）

~ お知らせ広報「県木連だより」、林野庁長官賞「広報もくれん」、IT 化対応「もくれん Com.」、そして？

▼広報もくれん「林野庁長官賞」を受賞（平成 4 年）



▲静岡県木連だより第 12 号（昭和 53 年）　　**広報もくれん第 200 号は初のカラー印刷（平成 11 年）▲**

本会では、1973(昭和 48)年から「静岡林材新聞(県木連だより)」、次いで 1976(昭和 51)年から「静岡県木連だより」として B4 判の団体報が発行されていた。1982(昭和 57)年、木材 PR 事業のスタートを機に「情報キャッチボール」(後日、情報ストライカーに変更)を合言葉に、会員向け広報活動の一環として業界トピック、異色企業の訪問や独自経営を進める産業人等へのインタビュー、木造施設等の現場取材、地域研究機関・静岡大学農学部のコラム等を掲載した「広報もくれん」(B 5 判・12 ページ)として復刊し、2002(平成 14)年 3 月・№232 まで足掛け 20 年間継続発行し、1992(平成 4)年には林業関係広報コンクールで最優秀賞の「林野庁長官賞」を受賞した。この間、創刊 100 号は小澤普照 林野庁長官への「訪問インタビュー」、創刊 200 号は初のフルカラーで、特集は星出昭専務理事の「時代の波と変化の因果」、最終 232 号の特集は中島公望専務理事の「改革は進んでいるか？」をお届けした。

2001(平成 13)年度には新間溥二会長が主導し 8 日間、県内 15 会場で「組合員との地域懇談会」を開催し、これを踏まえ改革委員会(影山弥太郎委員長)における検討・提言を踏まえ、広報紙の発行方針が大きく変わることとなった。IT 化が加速するなか、組合員の実態をアンケートした結果、既に約 60%がインターネット、経理処理、文書作成等で情報化を進めており、「活字媒体＝広報もくれん」とのミスマッチが確認できた。

▲最終 第 232 号の特集「改革は進んでいるか？」

そこで、2002(平成 14)年 6 月より HP 上に簡便な IT 広報「もくれん Com.」(A4 判・4 ページ)を随時掲載することとし、以後 7 年間・№24 まで情報発信した。その後、事務局減員による取材・編集業務の過重、掲載情報に対する評価、情報提供の加速化要求等を踏まえ現在は休刊となっているが、木造施設の建設事例紹介のシリーズ企画「すすむ木造化」(広報もくれん)、「木造化ファイル」(もくれん Com.)の続編は、今日まで継続して HP にて「やすらぎの木の施設紹介」として情報発信を続けている。Web 主導の新時代、団体報はどのようなスタイルで、何を伝えていくのか。

➤関連広報：ミスマッチはないか？情報化に対する実態調査（広報もくれん第 226 号）

● 情報キャッチボール「広報もくれん」発刊の足跡

▲左から：広報もくれん号外、同 創刊第 1 号、同 最終 232 号、もくれん Com.最終第 24 号

No.	発行日	企画記事
号外	1982(昭和 57)年　9 月	厚生年金基金を考えよう　厚生年金基金制度調査委員会
1	10 月	効率的な PR に向けて　木材広報宣伝専門小委員会
2	12 月	おめでとうございます　昭和 57 年度晴れの受賞者
3	1983(昭和 58)年　1 月	会長年頭所感　木材利用思想の浸透を
4	2 月	58 年度事業の円滑運営を　企画運営委員会答申
5	3 月	新年度 PR 事業は 3,000 万円予算で！
6	4 月	58 年度の材木屋の行動　こどもたちに豊かな教育の場を！
7	5 月	おめでとうございます　昭和 57 年度春の受章者
8	7 月	第 33 回通常総会開く　川口体制再選さる
9	8 月	ゆとりの住まい、うるおいの街テーマに 第 19 回静岡県住宅展開く
10	9 月	「活路開拓調査指導事業」動く
11	10 月	「木の日」静岡県大会へ参加を！
12	11 月	拡げよう！ 緑の森林、木の香の住まい 「木の日」街に出る
13	12 月	時代は顧客中心主義「木造住宅相談員育成研修会」開く
14	1984 年(昭和 59)年　1 月	会長年頭所感　新春に進運を期待する
15	2 月	2 月県議会で条例改正　3 階建木造住宅 GO！
16	3 月	「ふじえだ駿河台」第 1 回展示分譲終わる
17	4 月	「木造建築士」資格制度スタート
18	5 月	静岡県木材産業振興基金の早期実現を！！
19	6 月	第 34 期通常総会開く
20	7 月	ポスト再編　木材産業拠点整備緊急対策事業開始
21	8 月	第 1 回静岡県優良展示即売会を開催します
22	9 月	'84「木の日」県大会プログラム決まる
23	10 月	第 20 回静岡県住宅展　しずおかリビングショー'84 盛況
24	11 月	第 1 回静岡県優良材展示即売会(素材の部) 盛況裡に終了
25	12 月	増改築はベンチャー・ビジネス '84 住まいのリフォーム・セミナー開く

26	1985(昭和 60)年　1 月	会長年頭所感　丑年、気魄ある姿勢で！
27	2 月	製材品の部　優良材普及展示会・即売会へ出品を！！
28	3 月	ユーザーを巻き込み「木の文化」シンポジウム開く
29	4 月	常設団体として広く活動　「静岡県住宅振興協議会」発足
30	5 月	産官学一体で活路を「清水地域木材技術開発振興会」発足
31	6 月	困難な時代を団結の力で　第 35 期通常総会開く
32	7 月	‘85「木の日」統一事業は木都・島田で
33	8 月	基礎知識の修得を　静岡木協講座「木を科学する」開講
34	9 月	‘85「木の日」統一事業　県大会、優良素材展即会決まる
35	10 月	昭和 61 年度予算編成に向け「木材産業振興」に陳情動く
36	11 月	祭りムードの中で盛大に「木の日」静岡県大会 やすらぎのウッディライフ‘85
37	12 月	森林・林業、木材産業　活力回復 5 カ年計画決まる
38	1986(昭和 61)年　1 月	会長年頭所感　活力回復元年　体力強化から体質強化へ
39	2 月	木造校舎補助単価 7 割増など「木材使用促進施策」大幅前進
40	3 月	61 年度事業計画に向け 部会制・マウス実験など企画運営委員会が具申
41	4 月	新時代を勝ち抜く経営者のために「トップマネジメントセミナー」開く（トーヨーサッシ・潮田健次郎社長）
42	5 月	中小企業事業転換円滑化事業 難燃化、防腐化等材質改良の研究を
43	6 月	ご支援とご協力を 昭和 61 年度事業のすすめ
44	7 月	生産の合理化、高度化のために 「体質強化緊急対策事業」詳細決まる
45	8 月	居住性の評価　マウス実験 第 1 次中間報告
46	9 月	もくもくまつり‘86 きまる 一般消費者、お得意さん同伴で、大集合！
47	10 月	4 寸角柱の住宅に　公庫 200 万円割増融資 県地域優良木造住宅制度
48	11 月	「木の日」静岡県大会 もくもくまつり‘86 大盛況！　誘客作戦大あたり
49	12 月	総合木造建築促進策実現へ！！建築基準法改正を盛り込む 木造 3 階建にも道をひらく
50	1987(昭和 62)年　1 月	居住性の比較　マウス実験 第 2 次中間報告まとまる
51	2 月	売上税対策衆知を集めて　各地区木協でまず説明、検討会を
52	3 月	売上税、その後　単協、地区協で対策会議進む
53	4 月	総合コンサルティング拠点 木材展示情報センター　沼津設置へ
54	5 月	62 年度事業計画、予算編成に向け 企画運営委員会が意見具申
55	6 月	昭和 62 年度事業始動　県木連第 37 期通常総会開く
56	7 月	地域に根ざした優良木造の推進を 地域木造住宅供給実態調査から
57	8 月	衆知を集め、英知を絞れ！ 3 委員会、 4 部会スタート
58	9 月	国際居住年記念事業 ウッディチャレンジ カーニバル もくもくまつり‘87 きまる
59	10 月	建築部会提言書まとまる 軸組工法の合理化、木造住宅行政の強化など
60	11 月	国産材、流通両部会提言書まとまる 素材生産労務の実態調査、木材流通ネットワークシステムの確立など
61	12 月	外材部会提言書集約さる 立地特性を活かした生産品目など
62	1988(昭和 63)年　1 月	マウスが選んだ休息の場　62 年度マウス実験中間報告
63	2 月	「新素材開発による転換」中間報告
64	3 月	「WOOD TOWN プロジェクト」スタート 地域に根ざした良質木造住宅団地の建設促進
65	4 月	モデル木造建設と製品安定供給対策事業 昭和 63 年度県の新規事業

66	5月	マウス実験終了　証明された木の良さ　静岡大学農学部
67	6月	63年度事業にご支援とご協力を 本会第38期通常総会開く
68	7月	全単協参加「広報委員会」新設　昭和63年度委員会、部会委員決まる
69	8月	もくもくまつり'88に向け　中部地区動く
70	9月	住宅月間記念事業 木遊びワンダーランド もくもくまつり'88 GO！
71	10月	「新素材開発による転換」取りまとめへ（材質改良事業）
72	11月	住まい博・住宅展に7万人　材質改良事業試作品に注目集まる
73	12月	広報委員会意見書まとまる　対内広報の充実と木材ＰＲの強化を
74	1989(昭和64・平成元)年　1月	新春アンケート　会員100人に聞きました テーマ「広報もくれん」
75	2月	駿府城巽櫓落成へ　木材乾燥が建物の寿命を保証
76	3月	抜かりはないか？消費税対策　全国一本外税方式による取引
77	4月	木製ドア、60分耐火試験をクリア!!スギ材を用いた難燃ドアの開発
78	5月	63年度事業から…市場調査活動・木材ＰＲ・材質改良
79	6月	平成元年度事業の概要　'89事業スタート　基本課題は3ツ
80	7月	平成元年度委員会、部会委員決まる　「作業環境整備検討委員会」新設
81	8月	スーパー301条　日米林産物貿易の技術的障壁に対する包括貿易法
82	9月	木青連は、いま　　2／3が、若きウェルテル
83	10月	現場報告　作業環境と雇用問題　作業指示、査定制度を計数化
84	11月	会員100人に聞きました　テーマ「消費税、その後」
85	12月	若者雇用・イメチェン・週休2日・機械化
86	1990年(平成2)年　1月	平成元年度　三委員会提言書まとまる
87	2月	木材製品の部材化を　－建築部会、提言書まとまる
88	3月	労働力確保への施策を　－素材生産部会、提言書まとまる
89	4月	子供達へのアプローチを　木とくらし「イキイキモニター'89」の活動から
90	5月	スギ中目材によるモデル製品開発　新商品開発委員会
91	6月	会員100人に聞きました　テーマ「新技術・新商品開発」
92	7月	ひとこと　今春の各地区単協総会で新組合長に選任された各氏から抱負を
93	8月	平成2年度　委員会委員決まる
94	9月	ずっと、ＷＯＯＤコミュニケーション　もくもくまつり'90
95	10月	住まいと健康を考える　もくもくまつり'90
96	11月	もくもくまつり'90を振り返る
97	12月	洗練された木造住宅を　イキイキレポートから
98	1991年(平成3)年　1月	地域の特性を活かす　桑野山団地・高郷団地・身成団地
99	2月	専門委員会を設置し、実行へ　未来像研究委員会提言書から
100	3月	フロンティアスピリットが大切　ぶらり訪問　農林水産省林野庁長官
101	4月	土塗り壁同等スギ難燃外壁材の開発　新商品事業化推進委員会
102	5月	会員100人に聞きました　テーマ「工場残材」
103	6月	魅力ある業界づくりを中心に　第41期通常総会開催
104	7月	独自ＰＲ、実態と必要性にギャップ　会員100人に聞きました「木材ＰＲ」
105	8月	実行力に期待　平成3年度委員会委員決まる

106	9月	施行1ヵ月、求められる普及努力　会員100人に聞きました「新ＪＡＳ」
107	10月	青い屋根と飾り窓　天竜市上阿多古幼稚園
108	11月	手作りイベントに満足感　「もくもくまつり'91」を振り返る
109	12月	木造指向強し、さて、その内訳は　'91住まい博
110	1992(平成4)年　1月	実用化に向けて　実大スギ難燃外壁の試作と性能
111	2月	広報委員会・企画委員会、提言書最終取りまとめ
112	3月	まず、経営者に向けたテーマで　会員100人に聞きました「セミナー」
113	4月	ぶらり訪問　(財)静岡県科学技術振興財団常務理事
114	5月	木三共の制限合理化を追う　検証　建築基準法改正
115	6月	平成4年度事業スタート　人材育成と付加価値戦略で、活性化、組織強化を
116	7月	新リーダーに聞く　今春の単協総会で新理事長に選任された6氏から
117	8月	平成4年度委員会委員決まる　42名が考える業界の明日
118	9月	ハウツウを付けて　ぶらり訪問　（社）日本DIY協会副会長
119	10月	ラブコールに応える　'92住まい博
120	11月	地域に即し、無理なく継続を　「もくもくまつり'92」を振り返る
121	12月	錦秋去り、PR効果いかに！？　秋のイベント活動報告フラッシュ
122	1993(平成5)年　1月	大学の現状と将来について　「ウッディエンス・しずおか」101回記念
123	2月	最終提言取りまとめへ　委員会協議経過中間報告
124	3月	追悼　新間伊津平さん
125	4月	林業教育に自信　ぶらり訪問　中国吉林省林業庁々長
126	5月	建築技能者との共生をはかる　機械プレカット加工に関する需要意識調査から
127	6月	第43回通常総会　業界の再構築は組織づくり人づくり物づくりを通じて
128	7月	新リーダーに聞く　今春の単協総会で新理事長に選任された4氏から
129	8月	需要の秋、ＰＲは住宅展ともくもくで
130	9月	体系的に実践する　ぶらり訪問　掛川市長
131	10月	来場者、5万人余で大盛況　'93住まい博
132	11月	誰のため？何のため？目的、運営、再考の時　もくもくまつり'93
133	12月	常連さん増え、地域に定着　単協フラッシュ
134	1994(平成6)年　1月	共生の建築学と木造住宅　森林と住まいをつなぐ産地交流会
135	2月	三委員会、提言書まとまる
136	3月	未来構想の実現に向け　ぶらり訪問　静岡県家具工業組合 理事長
137	4月	木工産業に力を　ぶらり訪問　中国吉林省林業進出口公司 総経理
138	5月	組合のリストラは、まず新たな合意形成から　会員100人に聞きました「組織再構築」
139	6月	再構築に向け地域産業ビジョンの策定を　第44期通常総会
140	7月	自粛とコストアップの間で問題あり、7割越す　会員100人に聞きました「過積載対策1ヵ月」
141	8月	総務、広報、ビジョン、全県から39名参加　平成6年度委員会
142	9月	住宅展ともくもくで、木を学ぶ、木と遊ぶ
143	10月	多様な木材産業のひろがり　'94北欧木材産業視察より
144	11月	業界ＰＲにも一役　もくもくまつり'94
145	12月	秋晴れのもと、各地で多彩なＰＲ　秋のイベント活動報告フラッシュ

146	1995(平成7)年　1月	最終需要を見通す　大桶治雄 林野庁林産課長ご来静
147	2月	変革の時、組合事業総点検　総務、広報、ビジョン各委員長に聞く
148	3月	家屋倒壊、その原因は？　阪神大震災現地調査レポート
149	4月	関心度、基本事項の理解、いまひとつ　会員100人に聞きました「製造物責任法」
150	5月	迫力ある経営の実践に触れたい　「'95木材産業・経営塾」を振り返る
151	6月	産業ビジョンの具現化に向けて　第45回通常総会
152	7月	構造材加工から、総合資材供給へ？　プレカット工場アンケート調査
153	8月	軸組を守り、育てる　ぶらり訪問　静岡県木造建築工業組合 理事長
154	9月	変革期の物づくり、住空間を創造する　新企画「エコトーク」
155	10月	復興シナリオ公表され、槌音急　神戸再訪
156	11月	木造軸組みの耐震をメインテーマに　'95住まい博
157	12月	定着したか？地域密着型　イベント・ＰＲの秋
158	1996(平成8)年　1月	木造住宅、強さの実証！倒壊の反証？木造住宅振動実験レポート
159	2月	提言に向け、最終調整中　各委員会取組中間報告
160	3月	部会だより　早春土佐めぐり
161	4月	新しいモノサシの模索　もくもくフォーラムinしまだ
162	5月	創造力が会社をのばす　'96けん木れん経営塾を振り返る
163	6月	地域住宅供給の流れを作ろう　第46期通常総会開く
164	7月	乾燥材の供給は業界の責務　乾燥施設アンケート調査結果
165	8月	まだ多くの開発分野が　ぶらり訪問　庄田鉄工㈱代表取締役社長
166	9月	成長分野は環境と健康　ぶらり訪問　和信化学工業㈱代表取締役社長
167	10月	求められる、確かな品質　'96住まい博
168	11月	地域色、キラリと光る企画で　もくもくまつり'96in掛川城
169	12月	異業種共同、フォローアップも　秋の地域イベント
170	1997(平成9)年　1月	ダイナミックに発想できませんか　「第2回エコトーク」
171	2月	天窓のある園舎　すすむ木造化　森町立 天方幼稚園
172	3月	集中討議、提言へ、実践へ　組織委員会・木材PR実行委員会
173	4月	明日の製材に夢をかける　行政統計にみる製材十年一昔
174	5月	室内汚染と住まいの健康　ぶらり訪問　静岡大学農学部教授
175	6月	PR強化と構法の高度化に向けて　第47期通常総会開く
176	7月	変革期に新風を吹き込む　リーダーに聞く
177	8月	地域住宅産業を目指します　ぶらり訪問　全建連常務理事
178	9月	国産材の価値観を問う　ぶらり訪問　佐久間町長
179	10月	転換期の動向を知る　'97住まい博
180	11月	原点に立ち返り、3点セットで「木の日」記念催事を振り返る
181	12月	地域密着、またれる新企画　地域のPR活動
182	1998(平成10)年　1月	お客様の心をつかむ　ぶらり訪問　㈱アンファン代表取締役
183	2月	のびのび空間の演出　すすむ木造化　天竜市立光明幼稚園
184	3月	林業に誇りと希望を　九州スギ材産地を往く
185	4月	木造で頑張る静岡の住宅　木材界寸描

186	5月	求められる低コスト化　スギ乾燥材供給の現状と将来動向に関する調査 結果
187	6月	新「木材業界」の再構築を目指し　第48期通常総会開く
188	7月	総合利用を追及すべきですね　ぶらり訪問　静岡大学農学部助教授
189	8月	コストと利用意義を説け スギ乾燥材供給の現状と将来動向に関する調査 結果2
190	9月	学び、教育し、ネットワークを作る　ぶらり訪問　木造建築研究フォラム企画委員長
191	10月	求められる情報拠点　第34回静岡県住宅展アンケート結果
192	11月	井の中の蛙　中国地方木材産業の見聞記
193	12月	組織を活かし、業界に喝　地域のPR活動
194	1999(平成11)年　1月	新春企画　若い力で、木造文化の継承と現代化を
195	2月	性能化時代をバネに　ぶらり訪問　㈶日本住宅・木材技術センター専務理事
196	3月	家づくりネットワーク化のすすめ　平成10年度地域住宅産業推進事業の経過報告
197	4月	危機感を追い風に　ぶらり訪問　中部機械製造(株)代表取締役
198	5月	快適な住まいは健康か？　木造建築研究フォラムの講演会から
199	6月	消費者満足に向け、3本柱で　第49期通常総会開く
200	7月	時代の波と変化の因果　木材産地・静岡～過去、現在そして未来へ
201	8月	実業に即した声を単協に　林政の基本的課題公表さる
202	9月	千載一遇のチャンスです　ぶらり訪問　㈱アイ・ディー・シー代表取締役
203	10月	“いいなあ”に応える　第35回静岡県住宅展をふりかえる
204	11月	日本共通では、競争力は生まれない　北上秋彩紀行
205	12月	独自のカラーで継続を　地域のPR活動
206	2000(平成12)年　1月	基本に忠実であれ　ぶらり訪問　中勢林業㈱代表取締役社長
207	2月	いま一歩踏み出す時　地域住宅産業推進事業・開発委員会
208	3月	大変なんです、住まいの空気　ぶらり訪問　北里研究所病院臨床環境医学センター部長
209	4月	我々だからできること　地域住宅産業推進事業・開発委員会
210	5月	低コストにこそ、生きる道　九州地方をゆく
211	6月	一歩一歩、自ら拓く　第50期通常総会開く
212	7月	刷新、新しい波に挑む　ニューリーダーに聞く
213	8月	柔軟な発想が必要ですね　ぶらり訪問　東京大学大学院工学系研究科　建築学専攻助教授
214	9月	進んでる？木材乾燥　全国乾燥材生産状況調査から
215	10月	住まいを選ぶ女性の意識は？　日本木材総合情報センター調査報告書より
216	11月	化学臭、気にする派が70%　県住宅展「住まいのアンケート調査」より
217	12月	盛況！産業祭への相乗りイベント　地域のPR活動
218	2001(平成13)年　1月	地域工法を進めたい　ぶらり訪問　㈶日本住宅・木材技術センター理事
219	2月	決め手は、内装仕上げ材料？　シックハウス試験速報レポート
220	3月	総合化とすきま戦略　県林業技術センター振興協議会の現地視察から
221	4月	時代に見合った改正を　定款検討委員会
222	5月	木屑燃料ボイラーと地域貢献　焼却処分問題を追う
223	6月	常を疑って取り組む　第51期通常総会開く
224	7月	この結果、どう活かす？新築木質系住宅の「シックハウス」ホルムアルデヒド気中濃度の実態調査を終えて
225	8月	まず、情報の公開と発信を　ぶらり訪問　東京大学大学院農学生命科学科　生物材料科学専攻助教授

226	9 月	ミスマッチはないか？　情報化に関する実態調査
227	10 月	衆知を集めて改革へ　平成 13 年度県木連事業中間報告
228	11 月	健康、安心、快適に迫る　PR パンフ第 12 弾製作進む
229	12 月	地域に根付く相乗りイベント　単位木協の PR 活動から
230	2002(平成 14)年　1 月	需要の創造に向けて　新春企画・産学交談会
231	2 月	そのとき、トップは　ぶらり訪問　静岡県立大学経営情報学部専任講師
232	3 月	改革は進んでいるか？　地域懇談会その後

● ＩＴ広報「もくれん Com.」発刊の足跡

No.	発行日	トップ記事
1	2002(平成 14)年　6 月	捨てる、創る ～新年度スタート、懇談と改革の 13 年度、木材の利用を第一に
2	8 月	木材利用の促進　進む取り組み
3	11 月	初の試み、評価はいかに？ ～「木の日」週間記念催事・木を活かすフォラム 2002
4	2003(平成 15)年　1 月	課題は、会費と収支概算 ～改革提言第 2 弾！平成 14 年度改革委員会提言書から
5	3 月	消費者志向と潜在的欲求は？ ～消費者意識調査報告書から
6	7 月	聴く、視る、動く　～第 53 期通常総会開く・新間体制 2 期目へ
7	10 月	エコスクールの実現に向け　～単位木協一斉に要請活動
8	2004(平成 16)年　2 月	課題は、単協連携と後継者育成 ～平成 15 年度活性化委員会の提言から
9	6 月	機会を活かす　～第 54 期通常総会開く
10	9 月	単協からヒヤリング！　～平成 16 年度活性化委員会
11	12 月	県内の森林を元気に！　～「静岡県森づくり百年の計委員会」開催
12	2005(平成 17)年　3 月	会費算定方式、木使い運動の推進を！～平成 16 年度活性化委員会
13	7 月	木材活用が主役　～第 55 期通常総会開く
14	12 月	新年度に向け、活性化提言へ！　～振興対策委員会の協議終了
15	2006(平成 18)年　3 月	ヒノキの香りが脳を活性化！　～木の香り生体反応試験（速報）
16	7 月	顧客の視点に立って　～第 56 期通常総会開く
17	2007(平成 19)年　1 月	合法木材認定制度うごく ～違法伐採対策・改正グリーン購入法への対応
18	3 月	人づくり、組織づくり、制度づくり ～新年度に向け、振興対策委員会が提言
19	8 月	執行部留任、杉山体制 2 期目に ～「合法木材現場調査」の実施、「活力再生委員会」に始動
20	2008(平成 20)年　1 月	求心力を高めよう！　～登録・県産材・合法　3 制度一斉更新へ
21	3 月	新制度を活用し、組合組織の活力を！ ～活力再生委員会の最終提言書から
22	12 月	足掛け 3 年目の現状は ～合法木材供給事業者認定制度のいま
23	2009(平成 21)年　1 月	これからの天竜地域を考える　～浜松版システムの構築に向けて
24	3 月	腰を据え、後継者の育成対策を！ ～本年度の「活力再生委員会」の最終提言書から

11 木材 PR キャラバンと 2 つの全国会員大会（1975~、1981＆2004）

～ 静岡県木青連の総力を結集！

本県木材業界の次代を担う経営後継者団体はご存知とおり静岡県木材青壮年団体連合会(県木青連)である。県木青連は、昭和 50 年代から「住んでよし 心ゆたかなか 木の住まい」の PR 標語でデコレーションされたトラックで各都道府県を街頭 PR で繋ぐ「全国木材 PR キャラバン」、パンフレット・PR 標語ステッカー等のオリジナルツール「木材 PR パック」の販売等、木材 PR で全国を先導していたことから、この全国組織である日本木材青壮年団体連合会(日本木青連)の会長を輩出している。

▲デコレーショントラックで県内各地を巡回 PR した本県の「第 1 回木材カーニバル」（昭和 52 年）

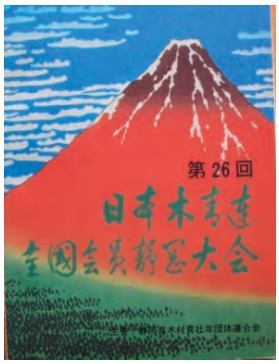
▲「全国木材 PR キャラバン」の木材 PR パックの各資料

日本木青連の前身である「全国林材青壮年団体連合会」時代の 1965(昭和 40)年に村松幸一、現在の会名になってからは 1980(昭和 55)年に影山弥太郎、2003(平成 15)年に影山秀樹の 3 氏が会長に就任している。1967(昭和 42)年以降、それまでの会員総会が大規模化して開催地持ち回りの「全国大会方式」となり、本県では昭和 56 年の第 26 回大会が熱海市、平成 16 年の第 49 回大会が静岡市で開催され、県木青連組織をフル動員した新企画や様々な「おもてなし」が準備された。「第 26 回大会」の式典では「日本木青連の山」造成、材鑑寄贈等記念事業の報告、牛尾治朗氏の記念講演等が行われた。翌日には富士山国有林 2.58ha にヒノキ 1 万本の「日本木青連の山」が記念植樹され、21 世紀への夢を託した「タイムカプセル」の埋蔵、資金開発を兼ね静岡市では「全国優良木材展示即売会」が併催された。

▲第 26 回 静岡大会式典（熱海市・世界救世教会館）、「日本木青連の山」記念植樹（富士宮市・富士山国有林）

「第 49 回大会」では、木工工作・木材活用コンクールの表彰式、田原総一朗氏の記念講演、「しずおか木使い県民運動」の分科会等多彩な記念行事が開催された。その結果、第 26 回大会は 1500 名、第 49 回大会は 960 名と、全国各地から数多くの参加者を得て盛会裏に全日程を終了することができた。その背景には、第 26 回大会の友田和夫、神谷雄介、第 49 回大会の福島覚、飯田真也の各実行委員長と県木青連会長を中心とした組織力の総結集があった。

なお、2011(平成 23)年の「第 56 回大会」は、東日本大震災後の「計画停電」に伴い、急遽、埼玉県から本県に会場が変更されたため、静岡県木青連の組織をあげ全面的に支援した結果、「埼玉大会 in 静岡」は、「震災復興決起大会」の役割を果たし盛会裏に終了することができた。



▲大会記念誌（第 26 回、第 49 回）、第 49 回 静岡大会式典（静岡市・ホテルアソシア静岡ターミナル）

➤関連資料：第 26 回 日本木青連全国会員静岡大会・大会記念誌（昭和 56 年 5 月 10 日）
第 49 回 日本木青連全国会員静岡大会・大会記念誌（平成 16 年 6 月 12 日）

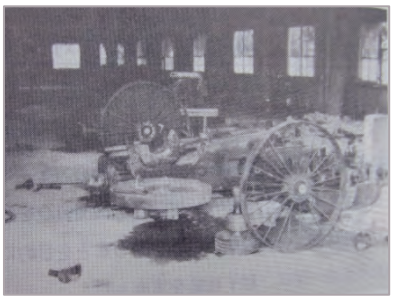
● 静岡県木材青壮年団体連合会の足跡

年度	会長(所属会団)	会団数等	会員数(人)	年予算額(千円)	年会費(千円)
昭和32～35	内山信一（二俣）	記録なし	記録なし	記録なし	記録なし
36～39	村松幸一（清水港）	〃	〃	〃	〃
40～41	滝浪　進（静岡）	〃	〃	〃	〃
42～43	岡野清次（太田川）	〃	〃	〃	〃
44～45	渡辺　実（清水港）	〃	〃	〃	〃
46～47	鈴木俊夫（天竜）	〃	〃	〃	〃
48	村松俊介(清水港)	14 会団	310	1,500	723
49	影山弥太郎(静岡)	〃	322	1,890	735
50	中西　基(裾野)	15 会団	319	1,510	788
51	友田和夫(太田川)	〃	314	1,650	778
52	松本博次(清水港)	16 会団	333	1,900	1,159
53	菅沼　久(御殿場)	〃	324	2,150	1,132
54	内山英夫(竜川)	17 会団	324	2,241	1,142
55	神谷雄介(清水港)	〃	326	10,836	1,800
56	杉山定久(裾野)	18 会団	332	5,850	1,780
57	太田幸作(二俣)	〃	309	5,500	1,725
58	小沢智吉(静岡)	〃	291	5,200	1635
59	川口正俊(田子浦)	〃	282	5,000	2,514
60	村越省吾(天竜)	17 会団	251	5,100	2,267
61	中野　仁(島田)	〃	230	5,500	2,120
62	片岡博昌(富士宮)	〃	219	5,550	2,043
63	河島壮太郎(二俣)	〃	187	5,450	1,819
平成元	真田善秋(清水港)	18 会団	188	5,550	1,856
2	横山貞治(沼津)	〃	172	4,830	2,104
3	渥美隆一郎(天竜)	〃	179	4,780	2,153
4	滝浪龍司(静岡)	17 会団	169	4,690	2,033
5	髙橋昭博(三島)	16 会団	156	5,700	1,892
6	内藤忠雄(二俣)	〃	153	4,800	2,330
7	柳川洋一郎(金谷)	〃	140	4,500	2,200
8	渡邉俊彦(御殿場)	〃	131	4,300	2,096
9	渥美友茂(天竜)	15 会団 2 地区	120	4,100	1,920
10	新間浩喜(清水港)	13 会団 4 地区	111	4,000	1,776
11	川口祐介(田子浦)	11 会団 4 地区	97	3,750	1,552
12	内山竜雄(竜川)	12 会団 3 地区	92	3,400	1,472
13	清水政幸(静岡)	10 会団 5 地区	78	3,300	1,280
14	稲葉　基(伊東)	10 会団 4 地区	70	3,400	1,120
15	飯田真也(天竜)	〃	68	4,200	1,088
16	加藤弘一(島田)	9 会団 5 地区	66	4,300	1,056
17	勝亦英樹(御殿場)	9 会団 4 地区	57	3,700	912
18	内山忠彦(天木産)	〃	46	3,900	736
19	神谷雄士(清水港)	6 会団 5 地区	37	3,410	592
20	〃	6 会団 4 地区	33	3,100	528

平成 21	影山秀樹(静岡)	5 会団 4 地区	32	3,100	512
22	〃	5 会団 2 地区	29	3,100	464
23	〃	〃	28	3,100	448
24	鈴木景士(天木産)	〃	28	3,150	518
25	〃	〃	33	3,350	611
26	鈴木達也(天竜)	5 会団 2 地区	48	3,350	528
27	〃	5 会団 1 地区	47	3,600	517
28	柿本貞治(島田)	4 会団 1 地区	41	3,650	462
29	〃	4 会団	35	3,630	385
30	鈴木　諭(天木産)	3 会団	32	3,250	352
令和元	〃	〃	36	3,300	396
2	杉山岳人（清水港）	〃	33	3,000	363

12 木材不況、構造変化への対応 ～再編整備、拠点整備、体質強化（1982～1989）

1982(昭和 57)年度、木材不況の深刻化、木材産業をめぐる構造変化に対処し、産業の再編整備をはかるための緊急措置として、製材業および合板製造業における「過剰設備の廃棄」や「生産方式の合理化」等を促進する必要から、全国木材協同組合連合会(全木協連)、日本合板工業組合連合会(日合連)を実施主体とし、民間資金の活用による低利融資を行う「木材産業再編整備緊急対策事業」が実施された。同事業では、融資希望額に応じ利子助成の運用原資となる 30 億円(国の助成金 20 億円と業界分担金 10 億円)の基金が造成され、元利取り崩し方式で事業実施者に利子助成が実施された。本会では、製材工場対策検討委員会(鈴木博委員長)を設置し、組合員の設備廃棄、生産方式の合理化に伴う負債整理、設備投資等に対する低利融資希望の緊急調査を実施した。



▲製材工場設備の破砕

その結果、32 件・1,558,300 千円(設備廃棄 30 件・1,458,300 千円、生産合理化 2 件・100,000 千円)の融資希望が回答され、希望額に見合った基金造成のため業界分担金の集約をはかった。その後、1984～87(昭和 59～62)年度には、事業体の集積をはかる「木材産業拠点整備緊急対策事業」、1986～1989(昭和 61～平成元)年度には、新分野への事業転換をはかる「木材産業体質強化緊急対策事業」を踏まえ、1990～1994(平成 2～6)年度には、合板製造業の国産材への原料転換を加えた「木材産業高度化総合対策事業」、1995(平成 7)年度から「木材産業高度化促進事業」と同種の助成事業が継続実施された。

本県では、一連の事業を通して、下表のとおり市街地等の製材工場の設備廃棄、郊外への集約移転、プレカット等合理化設備の導入が促進されることとなった。再編整備・拠点整備・体質強化の 3 事業が実施された 8 年間は、同時期に実施された「危機突破大会」、全県一円の「木材 PR 事業」の開始と表裏をなす業界苦渋の一断面である。

事業区分	年度	事業内容	件数	利子助成対象の融資額（事業費）
再編整備	昭和 57	設備廃棄	20	522,684 千円
		生産合理化	1	35,000
	昭和 58	設備廃棄	9	406,500
拠点整備	昭和 59	事業体集積	2	50,000
		生産合理化	2	75,000
	昭和 60	事業体集積	1	40,000
		生産合理化	1	20,000
体質強化	昭和 61	設備廃棄	9	497,000
		生産合理化	1	3,000
	昭和 62	生産合理化	1	53,000
	昭和 63	生産合理化	3	119,000
	平成元	設備廃棄	1	36,000
		生産合理化	1	8,000
		事業転換	1	120,000

注）資料：本会の通常総会議案書、全木協連 35 年の歩み（平成 8 年 10 月）ほか

13　学校内装は木材で ～ 行動マニュアルの集約と PR 資料の作成（1982～）

本会のキャッチフレーズ「木で３K! 健康・教育・環境」をあげるまでもなく、こどもたちの心身の発育に大きな影響を及ぼす、学校等文教施設の木造化・木質化の推進は木材業界の重要な取組課題である。1982(昭和 57)年、県木連では内装設計積算専門小委員会(影山弥太郎委員長)を設置し、この推進課題に取り組んだ。具体的には「行動マニュアル」の集約と PR パンフレット「こどもたちに豊かな教育の場を」(B5 判 14 ページ)の作成、これに基づく全県普及活動の展開である。「行動マニュアル」には、首長、教育長、市町の営繕担当課への要請活動はもとより、改築予定のある学校長、PTA 関係者への情報提供と懇談会の開催等、粗削りながら材木屋流の実践的な行動指針が提言された。PR パンフレットの作成では、静岡大学の岡崎光教授のご指導をいただき、公共施設設計業務に精通した設計者と連携し、学校内装木質化に向けた実務的な設計プランが展開図、詳細図として整理され、県内各地における単位木協ごとの要請活動や懇談会等普及活動の参考資料として幅広く活用された。

この内装木質化運動では、「床を磨いて、こころを磨く」を校是とする静岡市立安西小学校の 1983(昭和 58)年度改築工事に係る設計・施工で実践に移され、市街地における RC 校舎への内装木質化の優良事例として大きな反響をもって県内外に情報発信された。この木材供給業務は、静岡木材業協同組合(望月栄太郎理事長)が担当したが、公共納材業務の経験が浅い木材業界にとって大きな実務経験を得た半面、納材価格や品質担保に教訓を残し、その後の「材工分離」発注の実現に向けた礎となった。

公立の小中学校建物については、防災上、安全上の観点から不燃堅牢化が進められ、木造から RC 造への建て替えが進んだが、1985(昭和 60)年に文部省が発出した「木材利用の促進に関する通知」から順次所要の改正がなされ、35 年を経過した今日では新たな木造建築技術の開発と建築基準法の改正が相俟って、全国各地で木造校舎の建設が具現化されており、本県の内装木質化運動はこの先鞭を切るものであった。

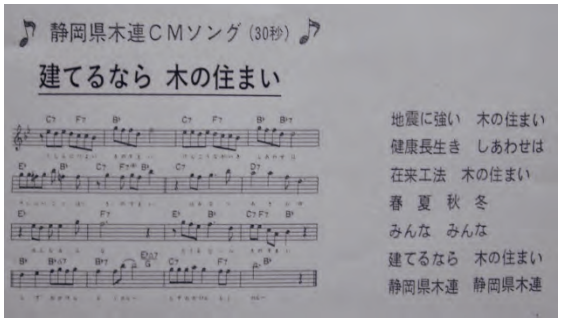
▲「ＰＲパンフレット」と「関連委員会の提言」（広報もくれん掲載）▼

➤関連広報　：　58 年度の材木屋の行動　こどもたちに豊かな教育の場を！（広報もくれん第 6 号）

14 木材 PR は無理なく、息長く ～ シリーズパンフレットの企画発行(1983～)

1978(昭和 53)年、需要者の住宅建設資金の融資を金融機関に斡旋し、住宅金融の拡充をはかるため、県木連有志会員 203 社により「静岡県木材住宅ローン協同組合」が設立され、これを足掛かりに業界は木材の加工販売から、木造住宅の建設促進に一歩踏み出した。その後、この流れを県下全域に広げるため 1983(昭和 58)年度、川口清俊会長のもと理事会傘下に設置された企画運営委員会(小澤雄太郎委員長)の提言を受け、木材 PR に特化した木材広報宣伝専門小委員会(髙橋孝三委員長)が設置された。同年度下期より、専門小委員会統括のもと、テレビ・ラジオ・新聞等マス媒体の活用、住宅展等の展示会、住まいの選択に決定権を持つ女性による「ウッディーモニター制度」、移動木工教室など、木材・木造住宅の PR 活動が大規模かつ多彩に展開された。

PR 活動の開始にあわせて復刊した「広報もくれん」紙上(昭和 57 年 10 月)では、髙橋孝三委員長が「効率的な PR に向け、会員英知の結集」を訴え、テレビ・ラジオ PR の音源として CM ソング「建てるなら 木の住まい」が作成された。PR の受け皿となる営業マンの育成に向けた「住宅相談員育成研修会」が県内各地で開催され、「木の住まい相談所」の店頭ステッカーが全組合員事務所に掲示された。



▲CM ソング「建てるなら 木の住まい」

▲大ヒットとなった第 1 弾 PR パンフレット（左）
最新第 47 弾は「コロナに負けるな！」PR キャンペーン（右）

▲木の住まい相談所・店頭ステッカー

年間予算 2,000 万円を超す業界単独 PR 事業は 1985(昭和 60)年度まで 3 年間継続した後、1986(昭和 61)年度以降は実施事業を精査し、1,000 万円以下の縮小予算で PR 活動が実施された。多額の経費が掛かるマス媒体による PR を木材業界が独力で継続することは至難であり、中間素材を取り扱う木材業界には馴染まないことも共通理解された。

その後、PR 活動は中だるみ感を持ちつつも継続され、1995(平成 7)年 1 月の「阪神・淡路大震災」を契機に、現在まで続く「無理なく、息長く」を旨とする PR パンフレット「木と豊かな暮らしを考える」シリーズの企画発行等、腰を据えた PR 事業に移行した。このシリーズパンフレットは、今日まで 4 半世紀にわたり「いやし・快適・実証・木育」などの 47 編の小テーマを掲げるロングラン発行を記録、延べ発行部数は 80 万部余となり、PR 資料の斡旋収入は、単位木協に対する「事業活動推進費助成金」原資の一部ともなった。

これまでの PR 活動の実務経験から、木材の持ち味は見て・触れて・香りを楽しむ「体感型の自然素材」と考え、2012(平成 24)年度からは、身近に木を感じてもらえるオリジナル木製 PR 小物を作成、「しずおか木使い県民運動」の一環として広く県民にプレゼントし、「木材ファンづくり」活動を進めている。時代の変化は激しく、活字から Web へ、木材 PR 活動も新たなステージに向かう。

➤**関連広報：**効率的な PR に向けて・木材広報宣伝専門小委員会（広報もくれん復刊第 1 号）

● PR パンフレット・シリーズ「木と豊かな暮らしを考える」発行の足跡

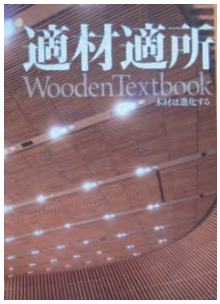
発行年度	発行№	タイトル
1996(平成 8)	第 1 弾・やさしさ篇	いきいきファミリーの「住まいと健康のおはなし」
〃	2　・強　さ　篇	もりもりパワフル木の住まい「強さの検証」
〃	3　・うるおい篇	親子で楽しむメルヘン「ウッディの不思議な木の国」
1997(平成 9)	4　・健　康　編	我が家のシックハウス対策　もくもくドクターの「室内空気汚染クリニック」
〃	5　・信　頼　篇	住まいるくんの「なるほど製材品学習室」
1998(平成 10)	6　・気くばり篇	木造バリアフリー　ヤドカリ君の「やさしい住まいさがし」
〃	7　・安　心　篇	法規くんの「とことん木材」
〃	8　・全　快　篇	体験主婦のアドバイス「これで全快！マイホーム後悔病」
〃	9　・ライバル篇	木造住宅 vs RC 住宅「住み心地　ライバル戦」
1999(平成 11)	10　・いやし篇	人と地球を健康にする「緑ちゃんのヒーリングハウス」
2000(平成 12)	11　・実　証　篇	新築住宅 44 棟のシックハウス度調査「静岡発・けんこう新世紀」
2001(平成 13)	12　・快　適　篇	「Wood　Voice」木の家に住みたくなる本
2002(平成 14)	13　・ネットワーク篇	自然番地のある住まい
2003(平成 15)	14　・環　境　篇	自然と木の童話集「芽ばえのリブレ」
〃	15　・リフォーム篇	「木でリライフ」健康・快適志向のリフォーム読本
2004(平成 16)	16　・アメニティ篇	「快適さって、なに？」人間らしさ、自然さを科学する。
〃	17　・学　校　篇	あったらいいな！「木」の授業　もくもく学校・未来へのびる苗木たちへ
2005(平成 17)	18　・極　意　篇	もくもく大魔王「木の家づくり極意」　「？」が「！」になる 5 つの教え
〃	19　・棟　梁　篇	「ちびっこ棟梁の大工しちゃうぞ！」暮らしで実感、木の魅力
2006(平成 18)	20　・自然博篇	さあ、木の世界を探検しよう！「わくわく木のパビリオン」
〃	21　・研　究　篇	「Wood　Science みる・かぐ・ふれる」木が人に与える効果の研究
2007(平成 19)	22　・実　験　篇	WOOD－POWER「なるほど木の強さ」実験版
〃	23　・生　活　篇	なんで？坊やの元気の出る木の住まい
〃	24　・居住性篇	「生命を育む木の空間」木の居住性の評価に関する「マウス実験」レポート
2008(平成 20)	25　・働　き　篇	「木は働きます。」健康も快適も、エコも、みんな木がつくってくれる
〃	26　・おしゃれ篇	「おシャレな木の住まい」home　sweet　home
2009(平成 21)	27　・イキイキ篇	「人にやさしい空間づくり」木造高齢者施設における住環境調査
〃	28　・おくすり篇	元気の処方箋「木は自然のくすり」
2010(平成 22)	29　・見える化篇	「eco　Research」木造観光宿泊施設「白樺荘」の建設にかかる CO_2 排出量の調査
〃	30　・もったいない篇	もったいない一家の「住まいづくり奮闘木」
2011(平成 23)	31　・語り部篇	「ウッドナレーター お話の苗木くん」みんなに届けよう、とっておきの木のお話
〃	32　・衣食住篇	衣食住のプロにきく「五感がよろこぶ住まいづくり。」
2012(平成 24)	33　・情報館篇	木と森のこども情報館「もっくんのいきいき木(もく)トピア」

2012(平成 24)	第 34 弾たしなみ篇	木をたしなむ「木材ファン育成講座」基本編・応用編・発展編
2013(平成 25)	35　・ﾌｯﾄﾜｰｸ篇	木の住まいで、いきいきフットワーク「我ら、ウッドイレブン。木ックオフ！」
〃	36　・木　育　篇	もしも、この世に木がなかったら「わたしたちと木の物語」
2014(平成 26)	37　・幸　せ　篇	木と暮らす幸せ「我ら、木(もく)イスト」
2015(平成 27)	38　・拡がり篇	木材は進化する「適材適所・Wooden Textbook」
〃	39　・気づき篇	暮らしが変わる！ 8 つの気づき 木づいたくんの「一生木材力」
2016(平成 28)	40　・元　気　篇	Powerful！ WOOD　LIFE「元気生活」
〃	41　・クイズ篇①	「楽しい木材クイズ Q20」木の？(疑問)が！(驚き)に変わる
2017(平成 29)	42　・シフト篇	木へシフトしよう「WOOD　CHANGE！」
2018(平成 30)	43　・リレー篇	いい家づくり、静岡は安心のリレー「Wood Baton Pass」
〃	44　・クイズ篇②	「楽しい木材クイズ Part. 2 」木の？(疑問)が！(驚き)に変わる
2019(令和元)	45　・夢　見　篇	木材女子の家づくり DREAM
2020(令和２)	46　・好　転　篇	木は人生好転材！～建材が変われば、人生が変わる。
〃	47　・新たな暮らし篇	木は、心地いい。～ステイホーム、リモートワーク、DIY 空間づくりに

【 シリーズ PR 資料・PR グッズの表紙画像(抜粋) 】

①第 33 弾・情報館篇＆第 17 弾・学校篇、②第 38 弾・拡がり篇、③マウス実験報告書＆第 24 弾・居住性篇
④第 10 弾・いやし篇＆第 3 弾・うるおい篇、⑤第 4 弾・健康編、⑥第 29 弾・見える化篇＆第 27 弾・イキイキ篇
⑦第 35 弾・ﾌｯﾄﾜｰｸ篇＆第 23 弾・生活篇、⑧第 41 弾・クイズ篇 1 ＆第 44 弾・クイズ篇 2 、⑨第 22 弾・実験篇＆第 21 弾・研究篇
⑩おもしろ実験キット ikiki、⑪かるた大好木、⑫木のしおり・木のシール・木はだ織りマット

①

②


③

④

⑤

⑥

⑦

⑧

⑨

⑩

⑪

⑫

● 木製 PR 小物の作成・配布の経過（木材ファンづくり活動＝県民プレゼント）

作成年度	配布品	備　考
2012(平成 24)	MUKU　TAMA （むくたま）	県産ヒノキの合法木材を使用した「健康グッズ」を「無垢のタマゴ」として作成しました。
2013(平成 25)	Petit　Maru （プチま～る）	広葉樹材ＰＲの一環として、サクラ材を使用して可愛い小物入れを作成しました。
〃	富士山マグネット	「富士山の世界遺産登録」を祝し、富士ヒノキの合法木材を使用して作成しました。
2014(平成 26)	手のひら木箱	「しずおか木使い県民運動」の一環として、県産ヒノキの合法木材を使用して「デスク内の整理箱」を作成しました。
〃	さんかくナベ敷き	「合法木材普及活動」の一環として、県産ヒノキの合法木材を使用して「身近な生活用品」を作成しました。
2015(平成 27)	Ｍｅｍｏり～な	木のある豊かな暮らしを楽しんでいただくため、県産ヒノキの合法木材を使用して「ミニメモ貼り黒板＆写真たて」を作成しました。
2016(平成 28)	和格子 mini トレイ	組子細工の匠の技を活かしオシャレな机上の一品として、県産ヒノキの合法木材を使用して作成しました。
2017(平成 29)	カラフルもっくん 幸&巧スター	職人の巧みの技が息づく「巧（こう）スター」、パステルカラーが幸福を呼ぶ「幸（こう）スター」。ヒノキの格子窓にカラフルなタイルをはめこみました。
〃	小さな飾り棚	県産ヒノキでつくった小さな、小さな飾り棚。DIY 感覚で組立てて、お部屋の片隅へ。フィギア、ミニグリーンなど、あなたのお気に入りを飾ってください。
2018(平成 30)	ゆらゆらチャーム	可愛らしさの中に和の趣を伝える木格子のチャームです。カバンやリュックに付けたり、車のミラーに吊るしたりドアノブに掛けたり、いろいろな使い方が楽しめます。
2019(令和元)	もっくんの Fight！メダル	「本会創立 70 周年」と「2020 東京オリンピックの開催」を記念し、スポーツバッグ、パスケースにつけるミニチャームを県産のヒノキ・合法木材で作成しました。
2020(令和２)	もっくんの 応援お守り！	「コロナに負けるな！」 香しい県産のヒノキ・合法木材を使って、魔よけの力があるといわれる三角形のお守りを作成しました。

【 木製 PR 小物の画像 】

①MUKU　TAMA(むくたま)、②Petit　Maru(プチま～る)、③富士山マグネット
④手のひら木箱、⑤さんかくナベ敷き、⑥もっくん「Memo り～な」
⑦もっくん「和格子 mini トレイ」、⑧カラフルもっくん「幸＆巧スター」、⑨小さな飾り棚
⑩もっくんの「ゆらゆらチャーム」、⑪もっくんの「Fight！メダル」、⑫もっくんの「応援お守り！」

① 	② 	③
④ 	⑤ 	⑥
⑦ 	⑧ 	⑨
⑩ 	⑪ 	⑫

15 県産優良素材展示即売会 ～ 随意契約からシステム販売へ（1984～）

開催地関係者のご尽力により、30 年間余にわたり継続開催されてきた県産材の優良素材普及展示即売会の経過です。当初は、県内国有林の随意契約出品材、自伐林家等による県産優良素材の PR を強く押し出し、東京営林局、静岡県等の後援を得た PR 展示会としてスタートした。

この間、1984(昭和 59)年の初回は静岡市開催となったものの、2 回目以降現在までは島田木協の会員である駿遠林業㈱（現㈱スンエン)を会場として継続開催されてきた。出荷者、買い方、会場関係者等のご意見を伺った結果、平成 15 年度の第 20 回展即会をもって優良素材に対する「表彰式」を中止し、その後は素材の即売に主眼を置いた催事として現在に至っている。

表彰式の中止を踏まえ、平成 16 年度の第 21 回展即会より郷土「木都・島田」を再認識してもらうことを目的とし、環境教育、体験学習の一環として島田木協主催により地域小学校の児童を招聘した原木市場、プレカット工場の見学会が今日まで併催されている。

開催経過は別表のとおりだが、県内の素材生産量が漸増する中、大型加工場の稼働と相俟って国有林が随意契約から協定締結に基づく「システム販売」へ移行し、県内民有林の素材流通も激変するなど、展即会をめぐる状況は大きく変化している。

● 静岡県優良素材普及展示即売会の開催経過

回数	入札日	会場	出品量(㎥)	回数	入札日	会場	出品量(㎥)
1	昭和59.10.15	静岡市・静岡木協市売事業部	1,600	20	平成15.11.11	島田市・㈱スンエン	1,264
2	60.10.9	島田市・駿遠林業㈱	2,100	21	16.11.9	〃	1,440
3	61.11.10	〃	2,500	22	17.11.8	〃	1,613
4	62.11.10	〃	2,433	23	18.11.7	〃	1,096
5	63.11.10	〃	2,100	24	19.11.6	〃	1,226
6	平成元.11.10	島田市・㈱スンエン	2,136	25	20.11.11	〃	1,200
7	2.11.10	〃	2,300	26	21.10.20	〃	1,197
8	3.11.11	〃	2,010	27	22.10.26	〃	1,212
9	4.11.10	〃	2,200	28	23.10.27	〃	1,119
10	5.11.9	〃	2,200	29	24.10.25	〃	1,364
11	6.11.9	〃	1,900	30	25.10.24	〃	1,420
12	7.11.7	〃	1,750	31	26.10.30	〃	1,002
13	8.11.12	〃	1,800	32	27.10.29	〃	1,041
14	9.11.11	〃	1,800	33	28.10.27	〃	1,025
15	10.11.10	〃	1,650	34	29.10.26	〃	896
16	11.11.10	〃	1,650	35	30.10.25	〃	900
17	12.11.7	〃	1,600	36	令和元.10.24	〃	785
18	13.11.6	〃	1,500	37	2.11.19	〃	813
19	14.11.12	〃	1,480				

▲昭和 59 年度・第 1 回展示即売会の開催告知
（広報もくれん第 21 号）

▲平成 16 年度・第 21 回展示即売会の併催催事
第 1 回原木市場見学会の報道記録
（静岡新聞・平成 16 年 11 月 10 日）

▲令和元年度・第 36 回展示即売会の会場風景

１６　２年間にわたる「マウス実験」～ 地域研究機関への委託研究の成果（1986～1987）

「我田引水」の木材ＰＲではダメ！ 木材の良さに「科学的な」裏付けを！

1985(昭和 60)年度の企画運営委員会(杉山修一委員長)の提言を受け、翌 1986(昭和 61)年度から 2 年間にわたり実施した「マウス実験」。渡辺益男、影山弥太郎の両委員が調整窓口となり、静岡大学・家畜飼育学研究室の水野秀夫 教授、森 誠 助教授、木材物理学研究室の有馬孝禮助教授のご指導を得て、ヒノキ・鉄・コンクリート「3種のゲージ」でハツカネズミの生育・生殖、嗜好性等の動物実験を実施し、各種材質の居住性の生物学的評価を行った。

▲静岡大学農学部の実験室

3 種のゲージによる比較実験の結果は衝撃的であり、この結果は、報告書、PR パンフレット、DVD に集約され、全国の木材・木造建築業界はもとより北米等海外業界からの資料要求にも応じ、国内外の木材 PR に幅広く活用された。この間、１年目の実験が終わりに近づいた頃、突如、大手住宅会社からマウス実験の結果について情報提供を求められた。

「広報もくれん」等会員限定の情報発信段階で、いち早く問い合わせのあった上場企業のアンテナの高さ、情報収集力に改めて驚かされたものである。

▲実験結果を伝える新聞報道

一連の実験結果は、木材学会等で発表されるとともに、新聞・テレビ等数多くのマスコミ報道、関連書籍へのデータ引用等は 30 有余と、非常に大きな波及効果を生み出した。2 年間の長期実験では、農学部学生・伊藤晴康君が計 30 箱のゲージ、300 匹を超すマウスの給餌、敷料替え、体重計測、行動観察等を毎日欠かさずに行うなど、動物実験を縁の下で支えてくれたことを記録に留めたい。

➤報 道 等：

【新　聞】静岡新聞「居住性、やはり木が一番」、中日新聞「木造住宅の良さ マウスも証明」、日本経済新聞「忘れ難き木の優しさ」、朝日新聞「匠の博物館・木の良さに科学的根拠」、神戸新聞「からだには『木』の家が最高！？」、北海道新聞「やっぱり木の温もり」、住宅産業新聞「木の優良性 マウスが証明」ほか

【テレビ】東海テレビ「発見！暮らしのサイエンス」、TBS テレビ「噂の！東京マガジン」、テレビ朝日「トゥナイト」、テレビ東京「レディス４」、宮城テレビ「白い国紀行」ほか

【書　籍】下記の書籍に実験データが引用されました。

木のびっくり話 100・日本木材学会(講談社)、世界でいちばん住みたい家(TBS ブリタニカ)、木材は環境と健康を守る(産調出版)、「いい家」がほしい(創英社)、健康な住まいを考える(武田出版)、エコマテリアルとしての木材((社)日本建築士会)、教育と施設「木の教育環境の調査研究」（文部省監修）ほか

➤PR 資料：報告書「マウスの飼育成績および嗜好性による各種材質の居住性の生物学的評価」（昭和 63 年 3 月)、パンフレット「生命を育む木の空間」、ＤＶＤ「生命を育む」

➤関連広報：マウス実験中間報告、初年度最終報告、2 年目中間報告（広報もくれん第 45、53、62 号）

17 「もえる・くさる・くるう」の克服 ～産官学連携による技術開発（1986～1991）

▼60 分耐火木製防火燃焼試験（日本住宅・木材技術センター）

委員会報告

木製ドア、60分耐火試験をクリア!!

スギ材を用いた難燃ドアの開発

設定性能と試作の方向

▲木製ドア 60 分耐火試験クリア（広報もくれん第 77 号）

広報 もくれん 1988 11 November

住まい博・住宅展に七万人

材質改良事業試作品に注目集まる。

展示の傾向は

本会の展示は

▲住まい博で事業成果を PR（広報もくれん第 72 号）

中小企業の歴史は事業転換の歴史ともいわれ、本県の地場産業のサンダル、プラモデルも、元来、木製の下駄や木製模型からの転換であり、そのルーツは木工業。「企業の寿命は 30 年」といわれるように、製品、業態、事業の転換は、時の経営環境の変化に対応し、企業が新たな成長をはかるための脱皮ともいえる。当時、急激に進行する円高により廉価な輸入材が急増し、国内製造業は厳しい状況にあり、本会では、「新事業転換法」の成立を機に、中小企業庁の支援を得て 1986(昭和 61)年度から 3 年間、静岡大学、県工業技術センター等と連携し、産官学体制により「木材材質改良の企業化システム開発」に取り組んだ。開発テーマは「燃えにくい木・腐りにくい木・狂いにくい木」の開発であり、静岡大学の平井信之、吉田弥明両教授のご指導を仰ぎ、本会の「事業転換推進委員会」、難燃薬剤・塗料・木工機械等関連企業との連携体制で開発事業は進められた。

最終年度の 3 年目には、スギ材を用いた木製難燃ドアの 60 分耐火試験をクリア、難燃 3 級同等内装材、表面硬化等の材質改良の技術成果を活かした壁材、床材、玄関ドア・テーブルセット等の家具類が開発された。一連の事業成果は、会員に対し県内 3 会場で成果報告会を開催するとともに、住まい博・住宅展、家具見本市で一般公表し、大きな反響を得た。周辺技術を活用し、天竜地域で若手会員グループがスギ難燃内装材を製造販売する新会社を設立し、本会と共同開発者との間で「木製防火ドアの製造方法に関する特許」、「樹脂含浸木材に関する特許」が出願された。技術成果の一端は、長期性能試験を兼ね、中川根町・ウッドハウスおろくぼ、修善寺町・県きのこ総合センター、沼津市・少年自然の家等の難燃内装材、同外壁材、たて突きスライス材が長期性能試験を兼ねてモデル施工された。「事業転換推進委員会」の各委員にとっては、開発事業を通じ交流のあった塗料メーカー等上場企業と連携推進した性能試験、市場調査、工業所有権取得等に係る開発経費の投入額を目の当たりにし、改めて開発技術・製品を事業化に繋げる難しさを痛感させられたリーディングプロジェクトであった。

その後、3 年間の事業成果を踏まえ、平成元年度から 3 年間は県森林・林業研究センターにも開発事業にご参画願い、林野庁の支援を得て実用化に向けた性能試験、試作研究を継続した。

➤関連情報：

昭和 61 年度 中小企業事業転換対策事業 報告書「新素材開発による転換」（昭和 62 年 3 月）

昭和 62 年度 中小企業事業転換対策事業 報告書
「新素材開発による転換」木材材質改良の企業化システム開発（昭和 63 年 3 月）
昭和 63 年度 中小企業事業転換対策事業報告書
「新素材開発による転換」木材材質改良の企業化システム開発（平成元年 3 月）
平成元年度 住宅部材国産化モデル開発事業報告書「内装材の難燃化と施工性の向上をめざして」（平成 2 年 3 月）
平成 2 年度 木質建材国産化モデル開発事業「外壁材の難燃化をめざして」（平成 3 年 3 月）
平成 3 年度 木質建材国産化モデル開発事業「難燃外壁材の実用化に向けて」（平成 4 年 3 月）

➤関連広報：

難燃化、防腐化等材質改良の研究を ほか（広報もくれん第 42 号、第 71 号、第 72 号、第 76 号、第 77 号）

● 産官学連携による新製品開発事業の足跡

年度	事業の概要	備考
昭和 61 ～63	テーマ：新素材開発による転換 ～木材材質改良の企業化システム開発 内　容：① 難燃 3 級同等内装壁材の開発 ガス有害性試験：(財)建材試験センター 燃焼試験：(財)日本住宅・木材技術センター ② ①の実大施工：中川根町・ウッドハウスおろくぼ ③ 60 分耐火木製防火ドアの実大燃焼試験 燃焼試験：(財)日本住宅・木材技術センター ④ 家具業界との連携による針葉樹家具、玄関ドア等の試作、家具見本市・住宅展への出展 PR	（中小企業庁） 中小企業事業転換対策事業 （工業所有権出願） 木製防火ドアの製造方法に関する特許 樹脂含浸木材に関する特許
平成元	テーマ：内装材の難燃化と施工性の向上をめざして 内　容：① 難燃 3 級同等内装材のパネル化による施工性向上 ② ①の塗装性と耐候性の検討 ③ たて突きスライス材の実大施工：修善寺町・県きのこ総合センター ④ ①、②の住宅展への出展 PR	（林野庁） 住宅部材国産化モデル開発事業
平成 2	テーマ：外壁材の難燃化をめざして 内　容：① 土塗り壁同等外壁材の開発（小規模） ② ①の性能評価燃焼予備試験 燃焼試験：(財)日本住宅・木材技術センター ③ ①の実大施工：沼津市・少年自然の家	（林野庁） 木質建材国産化モデル開発事業
平成 3	テーマ：難燃外壁材の実用化に向けて 内　容：① 土塗り壁同等外壁材の開発（実大規模） ② ①の性能評価実大燃焼試験 燃焼試験：(財)日本住宅・木材技術センター ③ ①の耐候性（屋外暴露）試験 試験機関：静岡大学農学部	（林野庁） 木質建材国産化モデル開発事業

18 「木の日」って何だっけ？

～ 決起大会から市民参加型「もくもくまつり」へ（1986～1997）

▲静岡市街地で「木の日」を PR
「木の日」決起大会（昭和 58 年度）

▲浜松市「もくもくまつり'86」（昭和 61 年度）
第 1 回「ミス木の精」コンテストの PR ポスター

十と八で「木」。十月八日は「木の日」。木材関係者ならば先刻ご承知の話。今、振り返れば日本木材青壮年団体連合会(日本木青連)が提案し、1977(昭和 52)年に制定された業界の記念日。

本県では 1982(昭和 57)年の全県木材 PR の開始に併せて、静岡、清水地区の林業・木材業・木造建築業関係者が参集した決起大会方式で「木の日」の記念催事がスタートした。翌 1983(昭和 58)年には、関係行政機関への陳情、「木の日」の横断幕、プラカートを掲げ、バトントワラー＆ブラスバンドの先導で「木製シャモジ」を配布し、静岡の中心市街地を街頭行進した。

その後、1986(昭和 61)年の浜松市開催からは、一般消費者参加型のイベント「もくもくまつり」として、西・東・中部の順で各ブロックの持ち回り開催となった。「木と遊ぶ」、「木を学ぶ」を主テーマに、多彩な企画が展開され、1990(平成 2)年度にはプレ・イベントとして「住まいのセミナー」の 4 連続開催、1992(平成 4)年度の清水市開催では海外木材企業の出展、静岡大学と連携した「木材科学館」と国際的、学術的な要素が加味された。そのほか地域服飾専門学校と連携したフォレスト・イン・ファッションショー、副賞にスギの山林プレゼントを謳った「ミス木の精」コンテストなど、運営委員会の若手会員からは硬軟交えた新企画が次々と打ち出された。なかでも、当時大流行した「ファミコン」のプレゼントを誘客ＰＲとした 1986(昭和 61)年度、浜松市開催の第 1 回もくもくまつり(稲勝哲夫実行委員長)は 3 万人余の来場者で会場周辺は大渋滞を来し、静岡市制 100 周年協賛事業として開催された 1988(昭和 63)年度催事(髙橋孝三実行委員長)は「昭和天皇崩御」により翌年 3 月まで延期という変則開催になるなど、天候に大きく左右されるアウトドアイベントの特殊性に加え、多くの突発事項への即応を迫られた実行・運営委員会の舞台裏はハラハラ、ドキドキの連続だった。

地区持ち回りが 4 回目を迎えると、多額の事業費、過大な労務等の運営課題に直面、1997(平成 9)年度の御殿場市開催(横山開一実行委員長)をもって全県催事は中止とし、その後は地域ごとの分散開催となった。木材業界の記念日「木の日」週間の市民参加型催事「もくもくまつり」は、大きな PR 効果を得るとともに林業、木造建築業等関連業界との連携強化の促進、イベントの企画立案、運営実務を通して青壮年組織の結束力の強化に大きな効果があった。

➤**関連広報：**もくもくまつり 86 大盛況！ 誘客作戦、大あたり（広報もくれん第 48 号）
十月八日再考 「木の日」って何だっけ？（広報もくれん第 155 号）ほか

●「木の日」記念PR催事 ： もくもくまつり等の開催経過

1982(昭和 57)年 10 月 8 日 静岡市・日本生命ビル	催事名：**「木の日」決起大会** テーマ：拡げよう！ 緑の森林 木の香の住まい 内　容：静岡、清水地区の林業界、建築業界との合同による決起大会、関係行機関への要請活動
1983(昭和 58)年 10 月 7 日 静岡市・静岡市民会館	催事名：**「木の日」静岡県大会** テーマ：拡げよう！ 緑の森林 木の香の住まい 内　容：林、材、建の 3 業界代表者の意見発表(提言) 関係行政機関へ要請活動 静岡市内の街頭行進(木製シャモジ配布)
1984(昭和 59)年 10 月 7 日 富士市・吉原市民会館	催事名：**´84「木の日」静岡県大会** テーマ：拡げよう！ 緑の森林 木の香の住まい 内　容：プレ・イベント　木遣り(静岡浅間神社木遣り保存会) メッセージ　法隆寺宮大工　西岡常一　棟梁 婦人消費者代表の提言 2 名 記念講演会　木の国の木の文化 講師　東京大学　村松貞次郎　教授
1985(昭和 60)年 10 月 6 日 島田市・島田市民会館	催事名：**「木の日」静岡県大会　やすらぎの Woody Life´85** テーマ：拡げよう！ 緑の森林 木の香の住まい 内　容：プレ・イベント　大奴、雅竜神太鼓 「木の日」の提言　婦人消費者代表 2 名 記 念 講 演 会 主　題：逢えてよかった〜私の子育て、住まい考 講　師：女優　浜　美枝　氏 県木青連第 10 回静岡県児童・生徒木工工作コンクール 特　記：第 1 回島田市木のまつり協賛事業(モクセイ苗木の無料配布)
1986(昭和 61)年 10 月 10 日 浜松市・浜松市総合産業展示館	催事名：**もくもくまつり´86** テーマ：木と遊ぼう　楽しい一日 内　容：伝統の道具展・木製生活用具展、木工工作コンクール、木の迷路、青空市場、第 1 回ミス「木の精」コンテスト など 特　記：業者大会から「市民参加型」のイベントへ。 天竜スギの木製ハガキ無料配布(3,000 名)。
1987(昭和 62)年 10 月 11 日 沼津市・沼津埠頭	催事名：**もくもくまつり´87** テーマ：ウッディチャレンジ・カーニバル〜モリモリやる木の運動会 内　容：チャレンジ・ザ・ギネス(500m のロングベンチ作成)、チャレンジ・ザ・クイズ(国際居住年記念クイズ)、チャレンジ・ザ・ランバー(親子で挑戦！木工教室)、チャレンジ・ザ・ウッドアスロン(木材利用の 8 種競技)、チャレンジ・ザ・ログ(丸太引き)、チャレンジ・ザ・ゲタ(下駄履きリレー)、チャレンジ・ザ・ビューティー(第 2 回ミス「木の精」コンテスト)ほか 特　記：木製ホルダーを無料配布(2,000 名)。

1989(平成元)年 3 月 26 日 静岡市・青葉緑地	催事名：**もくもくまつり´89** テーマ：木の良さ見つけた。わくわくワンダーランド 内　容：カーニバルランド(丸太担ぎ、バルーンショー)、ワンダーランド(ログキャビン展示、木製大型遊具広場、ザ・積み木 ing)、クラフトランド(移動木工教室・トンカチ号)、マーケットランド(木の国や、木の子、みどりの市)ほか 特　記：静岡市制 100 周年駿府博協賛事業としてヒノキ苗木の無料配布(3,000 名)。
1990(平成 2)年 （住まいのセミナー） 8 月 19 日～9 月 30 日 浜松市・プレスタワー （もくもくまつり） 10 月 10 日 浜松市・市立体育館 ＆浜松城公園	催事名：**もくもくまつり´90** テーマ：住まいのセミナー　提案します。より良いくらし もくもくまつり　ずっと、WOOD コミュニケーション 内　容：パネル展・水と緑とよりよい環境、伝統の大工道具展、親子木工教室、木製大型遊具広場、木工工作コンクール、フォレスト in ファッションショー、第 3 回ミス「木の精」コンテスト、青空マーケット ほか 特　記：プレイベントとして「住まいのセミナー」を 4 回開催。 主　題：私のライフスタイル 講　師：NHK チーフアナウンサー　加賀美幸子氏 ほか
1991(平成 3)年 10 月 6 日 富士市・中央公園	催事名：**もくもくまつり´91** テーマ：木と遊ぶ、地球の休日 内　容：勇壮・もくもく太鼓、夢気球・もくもく地球号、「木の日」体験バスツアー・もくもくウォッチング(富士ひのきを見る)、父の手作り・木の参観日、もくもく親子木工工作広場ほか 特　記：協賛催事「静岡県児童生徒木工工作コンクール」 9 月 26 日～10 月 2 日　富士市・パピー
1992(平成 4)年 10 月 10 日 清水市・マリンビル＆日の出埠頭	催事名：**もくもくまつり´92** テーマ：ウッディーポート in しみず 内　容：環境・科学館「なるほど・ザ・木材」、大型木製遊具広場「ビッグウッド」、木工工作広場「トントン」、イベント広場「わっしょいしょい」、青空マーケット「とく市とく座」ほか 特　記：環境・科学館展示は、静岡大学農学部、商社・北米産地シッパーとの連携、水面貯木場等清水港内の観光遊覧ツアーを実施。土壌改良剤の無料配布(2,000 名)。
1993(平成 5)年 10 月 10 日 浜北市・県立森林公園	催事名：**もくもくまつり´93** テーマ：森林王国・・・遊・・・YOU と 内　容：森の音楽会、もくもくスーパービッグクイズ、グリーンシャワー・ウォークラリー、森林(もり)の市・フリーマーケット、「木とわたし」中学生作文コンクール表彰式、児童生徒木工工作コンクール表彰式ほか

1994(平成 6)年 10 月 9 日 駿東郡清水町 ・柿田川公園	催事名：**もくもくまつり´94** テーマ：ふれてみませんか・・・木と水のハーモニー 内　容：三島しゃぎり、「木の日」体験バスツアー・函南原生林・巨大ブナを見よ！、餅まき「やんや」上棟式、もくもく親子トンカチ教室、クイズ ネイチャリングスタンプラリー、体験！きこりの広場、WAKU WAKU 湧水コンサート、ミニしゅっぽ試乗会 ほか 特　記：柿田川湧水の缶詰を配布(1,300 名)。
1996(平成 8)年 3 月 23 日～24 日 島田市・ 市民会館＆中央公園	催事名：**もくもくフォーラム in しまだ** テーマ：きいて、みて、ふれてみませんか「木の都」 内　容：(もくもくトーク・記念講演会) 主　題：樹木のように自然ぐらし 講　師：タレント・自然暮らしの会　代表　清水國明 氏 (もくもくコンサート) 木製打楽器とマリンバ・フルートの演奏会 (もくもくギャラリー) 木の住まい耐震コーナー、大井川流域林材業の歩みパネル展、木製オブジェ展ほか (もくもくウッディーパーク) 親子木工工作教室、木製遊具広場、起震車体験ほか 特　記：大井川蓬莱橋の無料通行手形(300 名)、島田市の花・バラ苗木の無料配布。
1996(平成 8)年 10 月 13 日 掛川市・掛川城公園	催事名：**もくもくまつり´96 in 掛川城** テーマ：ちょっと木になる話をしよう 内　容：耐震木造住宅展示、木製遊具コーナー、チビッコ木工工作広場、ミニ四駆大会 ほか 特　記：掛川城無料見学会(1,000 名)を開催。
1997(平成 9)年 (新聞広告) 10 月 1 日 (植樹祭･都市緑化 108) 10 月 5 日 沼津市街地 (フォーラム) 10 月 11 日 御殿場市・市民会館	催事名：**やさしさいっぱい　木の感謝祭´97** テーマ：木の文化を大切に　原点はヒューマニズム 内　容：(新聞広告) 室内空気汚染対策 Q＆A（静岡新聞・東部版） (植 樹 祭) 沼津市の木・松、裾野市の木・杉、御殿場市の木・けやき、小山町の木・ふじ桜、静岡県の木・もくせいを各所に植樹。 (フォーラム) 住まいと健康を考える 基調講演 主　題：住まいの安全 家族の健康 ～シックハウス症候群を考える 講　師：北里大学 宮田幹夫 名誉教授 特　記：都市緑化事業 108、新聞 PR 広告、パネルフォーラムの 3 本建て催事。

●「木の日」記念 PR 催事のアルバムから

＊「木の日」静岡県大会 やすらぎの Woody Life ´85

女優・浜美枝さんを講師に迎えた「記念講演会」、杉木立の会場は超満席（昭和 60 年 島田市）

＊もくもくまつり ´86　「木と遊ぶ」をテーマに市民参加型の屋外イベントへ大転換（昭和 61 年 浜松市）

＊もくもくまつり‘87　「モリモリやる木の運動会」初の港湾エリアイベントに（昭和 62 年 沼津市）

＊もくもくまつり´89　天皇崩御で年度末開催となった「市制 100 周年」協賛イベント（平成元年 静岡市）

＊もくもくまつり´90　「プレ・イベント」は 4 回連続で「住まいのセミナー」を開催（平成 2 年 浜松市）

＊もくもくまつり´91　「地球の休日」をテーマに市街地の市民公園を会場に（平成 3 年 富士市）

＊もくもくまつり´92　静岡大学と連携した「環境・科学館」なるほど・ザ・木材（平成４年 清水市）

＊もくもくまつり´93　アウトドア・スーパービッグクイズ、森の音楽会（平成５年 浜北市）

＊もくもくまつり´94　餅まき上棟式、「函南原生林」の体験ツアー、湧水コンサート（平成６年 清水町）

＊もくもくフォーラム in しまだ

タレント・清水國明さんを招いて「手づくりセミナー」と講演会（平成８年 島田市）

＊もくもくまつり´96 in 掛川城

「耐震木造モデル」と「ミニ四駆」ビッグウッドサーキット（平成８年 掛川市）

＊やさしさいっぱい 木の感謝祭´97

「市街地の植樹」とシックハウス問題をテーマに「パネルフォーラム」開催

（平成９年 沼津市・千本浜公園の植樹祭、御殿場市・住まいと健康フォーラム）

● 縁の下の力持ち ～あの日、あの時、運営委員会の若手スタッフは・・・。

▲設営作業は急ピッチで！
（もくもくまつり‘86・浜松市）

▲さあ！買った、買った
（もくもくまつり‘87・沼津市）

▲チェーンソーの使い方教えます！
（もくもくまつり‘89・静岡市）

▲体育館に森林出現？

▲搬入作業はフル回転！
（もくもくまつり‘90・浜松市）

▲雨中、熱気球をテイクオフ！
（もくもくまつり’91・富士市）

▲入場ゲートの設営じゃい！

▲ステージからの見晴らし最高！

▲設営日、安全と成功を祈願！
（もくもくまつり’94・清水町）

▲もっくんはボクです！
（もくもくまつり‘92・清水市）

▲駐車場はこちら・・・
（もくもくまつり‘93・浜北市）

▲植樹祭予定地で下準備
（木の感謝祭‘97・沼津市千本浜公園）

▲イベントを終え、清水國明さんと
（もくもくフォーラムinしまだ）

▲天守閣を仰ぎ、耐震モデルを施工
（もくもくまつり‘96 in掛川城）

19 人材の育成、時代と共に３種のセミナー

～ 有料化の試行・グループ研修・異業種連携の模索（1986～）

団体活動の中で研修会は重点事業のひとつ。これまで、時代に即したテーマと講師、様々な手法で研修事業を進めてきた。それまで単発開催してきた研修会を 1986(昭和 61)年度から、経営者向け「トップマネジメントセミナー」、経営後継者向け「グローアップセミナー」、幹部社員向け「シェアアップセミナー」として区分方式で開催した。翌 1987(62 年度)年度から各分野の専門講師を充実させ、「情報有料化」の試行として 3,000 円の受講料をお願いした。メーカー向けには乾燥・防腐・難燃、プレカット等の新技術、集成材等の新製品や海外産地事情、販売業者向けには建築法規、住宅税制、リフォーム、インテリアコーディネート等の最新テーマで 10 年間余にわたり延べ 60 講座余を継続開催した。

その後、県産材振興を目的とし県や各流域林業活性化センター等が「無料のセミナー」を開催したことを契機として、一時期これらとの共催、後援等連携推進に移行したが、2008(平成 20)年度の活力再生委員会(片岡博昌委員長)の提言を踏まえ、翌年度の企画推進委員会(中村泰平委員長)主管のもと後継者塾「ステップアップセミナー」が開催された。同セミナーは、研修用の参考読本「マーケティング戦略シート」が事前作成され、専門研修機関から講師招聘のもと、2009～2010(平成 21～22)年度にわたり県下 3 会場、一泊二日、延べ 6 日間にわたる総合集中方式で開催された。経営資源である「ヒト・モノ・カネ・情報」を学ぶため、体験学習方式、グループ学習方式が採用され、受講者が「自社の中期計画」を作成するという実践的で濃密な連続研修会が実施された結果、全課程の修了者 19 名に対し、本会会長名の修了証書が授与された。その後、同塾の修了生は各社の経営幹部として、また後継者団体のリーダーとして活躍している。

少子高齢化を背景に戸建住宅の建設が漸減し、今後、非住宅への木材活用を促進することを目的とし、2017(平成 29)年度から 3 年間にわたり、建築士と木材関係者間における「ヒトと情報」の相互交流をはかるため「ふじのくに木使い建築カレッジ」が県との共催により連続開催された。この研修事業では、建築士と木材人を繋ぐ、木材・建築分野の各専門機関から講師が招聘され、一泊二日の「基礎講座」、様々なテーマの「選択講座」、一連の講座を通して関心の高いテーマに基づきグループワークと専門講師のアドバイスを受ける「修了講座」等が精力的に開催された。3 年間のカレッジでは規定のカリキュラムの修了者延べ 62 名(建築士 38 名、木材人 24 名)に対し、県知事名の修了証書が授与された。今後、木材と建築をつなぐ「橋渡し役」としてカレッジ修了生の活躍が期待されるところである。企業は人なり、人こそが財産。団体の行う研修事業、時代と共に歩む「人財」の育成事業に終わりはない。

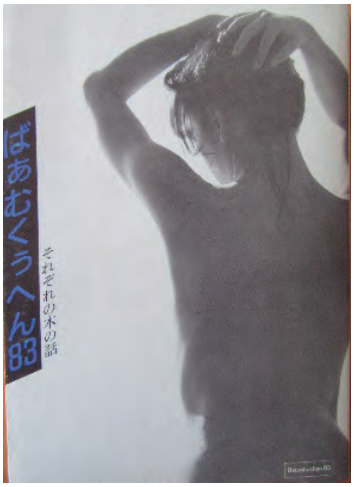
▲後継者塾・ステップアップセミナー（浜松市）

▲第１回建築カレッジ修了証書授与式（静岡市）

20 重ねた年輪を手づくり出版（1987 & 1991）

～ 静岡大学林産学科創設 25 周年を記念して

県内の製材・合板・紙パルプなど、林産工業の目覚ましい発展を背景に、林産技術者の養成を望む声が高まり、1964(昭和 39)年度、本会会長を世話人とする木材関連団体により「静岡大学林産学科設置期成同盟会」が組織された。同盟会を中心に、関係各方面に対し要請活動を行った結果、1966(昭和 41)年磐田市に林産学科が設置され、その後、1973(昭和 48)年に静岡市の現在地に移転となった。1991(平成 3)年 8 月、静岡大学農学部「林産学科」の創立 25 周年を記念し、1984(昭和 59)年から 7 年間にわたり「広報もくれん」に 83 回連載したコラムを書籍「ばあむくうへん 83～それぞれの木の話」として出版した。



▲記念出版・ばあむくうへん 83

コラムは「林産学科の窓」、「林産学科だより」、「ウッディエンス・しずおか」とタイトルは変わったものの、学科に所属するすべての先生方に執筆願い、木材関係者だけでなく、一般の人が読んでも身近な情報として役立つ「木材を切る話」、「清酒とスギ材」、「樹の香り」、「住宅の換気回数」、「ゴルフクラブと木材」など、幅広い内容となった。「カネなし、ヒマなし」で始まった編集作業では、鈴木滋彦助手のご協力をいただき、短期間、小経費で出版に漕ぎつけることができた。

83 編の年輪を重ねた記念図書は(B5 判・190 ページ) 1,500 部作成、寺谷文之農学部長に贈呈し、25 周年にひとつの花を添えることができた。

出版物について、もうひとつ忘れてはならないものがある。1987(昭和 62)年 3 月、木材 PR 事業の一環として出版した木造事例写真・技術資料「生の木（ki no ki)」（B4 判・48 ページ）である。

▲写真・技術資料集「生の木」

静岡大学の有馬孝禮助教授を編集委員長、建築士会の若手会員と県木青連会員で編集委員会を構成し、具体的な設計・積算資料として建築士を対象に企画された。県内外の木造建築物の事例写真、耐震・耐火、木造 3 階建などの多彩な技術資料を掲載し、県建築士会の全支部、県ならびに県内全市町村にも幅広く配布した。

なお、2 つの図書は「出版事業」の可能性を検証するため、首都圏、ならびに静岡市内の書店にて試行販売を行ったが、表紙デザインと掲載内容のギャップも大きな話題となった。

➤**関連広報：**記念出版・ばぁむくぅへん 83 それぞれの木の話（広報もくれん第 106 号）
ちょっときになる・生の木 ki no ki（広報もくれん第 53 号）

21 タテ・ヨコ・ナナメ ～ 業界情報の集約と課題の協議（1988～）

往時、他県の方々から本県業界を「国産材の天竜」と「輸入材の清水」による両輪駆動とよく言われたものである。時代は移り、本県のみならず業界模様は激変したが、組織運営では変わらぬものがある。会長を中心とし、丁寧に業界情報を集約し、広く課題を協議することである。往時は 60 名、現在でも 30 名を超す理事会で尽くせない議論は、諮問機関としての「各種委員会・部会」で、地域固有問題は 3 名の副会長が主管する「地区協議会」で、理事会に先立ち「正副会長会議」で事前協議、県木連と単位木協事務局による「事務責任者会議」も全国で唯一である。3 地区の地域協議会の運営については、静岡県中小企業団体中央会の「移動中央会」に倣って、1988(昭和 63)年度川口清俊会長時に「移動けん木れん」の併催を開始してから 30 有余年が経過し、「正副会長会議」の定例開催は新間溥二会長時に開始され、はや 20 年になろうとしている。

木材自給率の上昇等「国産材時代」の本格的な到来を踏まえ、斯業への的確な対応を図るため、2011(平成 23)年度杉山陽一会長時には会長指名による特任理事「国産材担当理事」が 3 地区から 1 名ずつ選任された。「会員の声を聴く」、「会員のためになる仕事をする」、業界団体として当たり前のことながら、何時しかあらぬ方向に向かってはいないか？1998(平成 10)年度の牧野平四郎会長時には「'98 木材界の明日を拓く交談会」が開催され、県内 3 地区で計 69 名の会員が出席し、132 件の発言があった。2001(平成 13)年度の新間溥二会長時代には「組合員との懇談会」が延べ 8 日間にわたり県内 15 会場、計 173 名の会員が出席し、671 件の提案・意見・質問があった。

▲平成 29 年度・東部地区の移動けん木れん
（富士宮市・富士山世界遺産センターの見学会）

これを踏まえ、平成 13、14 年度の改革委員会(影山弥太郎委員長)では、県木連組織と「自主的な木材業者登録」の実施、減速経済下の「効率的な事業と会費」の在り方、改正廃棄物処理法やダイオキシン類特別措置法の施行で厳しさを増した「焼却処理問題」等、喫緊課題に対する具体策が協議された。

２つの地域懇談会はいずれも現場経営者の「生の声」をきめ細かく聞き取るための巡回活動だが、本会組織力の源泉は、以上のような各種会議を「タテ・ヨコ・ナナメ」に開催し、丁寧な「情報集約」と「公開協議」を継続してきたことにある。

▲左　平成 30 年度・中部地区の移動けん木れん（静岡市・行政施策講演会）
右　令和元年度・西部地区の移動けん木れん（浜松市・浜松城天守門の視察会）

● 委員会・部会活動の歩み（1981-2020）

年度	委員会・部会名（所属木協・委員長、部会長）	協議・提案事項等
1981(昭和 56)	製材工場対策検討委員会（二俣・鈴木 博）	「木材産業再編整備事業」への対応
	厚生年金基金制度調査委員会（静岡・望月栄太郎）	基金制度に向けた予備調査、導入検討等
1982(昭和 57)	企画運営委員会（静岡・小澤雄太郎）	全県木材ＰＲ事業の推進等
	・木材広報宣伝専門小委員会（島田・髙橋孝三）	マス媒体PR、木の住まいマーク、相談員育成研修会等
	・内装設計積算専門小委員会（静岡・影山弥太郎）	学校内装の木質化に向けたマニュアル作成等
1983(昭和 58)	賦課金制度検討委員会（田方・稲葉義治）	徴収基準の抜本見直し等
	・木材広報宣伝専門小委員会（島田・髙橋孝三）	マス媒体(テレビ・ラジオ・新聞)によるPR事業の推進等
1984(昭和 59)	企画運営委員会（田方・稲葉義治）	理事定数等組織の見直し等
1985(昭和 60)	企画運営委員会（沼津・杉山修一）	「マウス実験」の企画提案等
1986(昭和 61)	企画運営委員会（静岡・小澤雄太郎）	「木造住宅相談士」資格制度の創設等
1987(昭和 62)	企画運営委員会（島田・町 二郎）	「業態別部会」の設置と運営等
	・国産材部会（天竜木産・梅林利彦）	機械化等による伐出搬出コストの低減等
	・外材部会（清水港・新間溥二）	港湾施設の整備強化等
	・流通部会（天竜木産・鈴木良介）	価格・供給の安定化対策等
	・建築部会（清水港・渡辺益男）	地域完結型供給体制の整備等
	賦課金制度検討委員会（天竜木産・尾上貞次）	新たな賦課因子の検討等
	事業転換推進委員会（委員長選任せず）	中小企業庁「新製品開発事業」への対応等
1988(昭和 63)	企画委員会（清水港・新間溥二）	単協事業の充実、技術開発の強化等
	・素材生産部会（気田川・天野政五郎）	労働力の確保、中目材の需要拡大等
	・製材部会（天竜木産・戸田尚男）	企業イメージの刷新、コスト縮減等
	・流通部会（天龍・八木政次）	木材流通ネットワークシステムの検討等
	・建築部会（志太・松本康元）	新工法の検討、販促資料の作成等
	財政委員会（天竜木産・尾上貞次）	手数料事業、有料セミナー等財源確保等
	広報委員会（天竜木産・鈴木良介）	効率的・継続的なイベント運営等
	事業転換推進委員会（委員長選任せず）	中小企業庁「新製品開発事業」への対応等
1989(平成元)	企画委員会（島田・西土 博）	木材需要の促進対策等
	・素材生産部会（気田川・天野政五郎）	安全衛生対策、労災保険の収支改善等
	・流通部会（天龍・八木政次）	製材品ストックヤードの整備等
	・建築部会（裾野・杉山寛和）	製品部材化、建築情報ネットワークの整備等
	広報委員会（浜松・今泉正男）	エコーはがきによるPR等
	新商品開発委員会（委員長選任せず）	中小企業庁「新製品開発事業」への対応等
	労務環境改善委員会（清水港・馬渕 孝）	「作業環境・雇用実態調査」の実施等
1990(平成 2)	未来像研究委員会（島田・西土 博）	常設木材情報センターの整備等
	広報委員会（静岡・佐野勝治）	業界広報マンの育成等
	新商品事業化推進委員会（委員長選任せず）	林野庁「モデル製品開発事業」への対応等
	労務環境改善委員会（浜松・梅林 昭）	「作業環境・雇用実態調査」を踏まえた対応等

1991(平成３)	企画委員会（天竜木産・戸田尚男） 広報委員会（田子浦港・佐野三郎） 新商品事業化促進委員会（委員長選任せず） 労務問題対策委員会（天竜木産・内山芳朗）	新たな共同事業、自主財源確保対策等 費用対効果に基づく広報事業の推進等 林野庁「モデル製品開発事業」への対応等 組織的な求人活動、労働時間の短縮、配送料の有料化等
1992(平成４)	組織強化委員会（天竜木産・伊藤公雄） 広報委員会（田子浦港・遠藤敏東） 労務問題対策委員会（大井川・松本 健） 活路開拓ビジョン調査事業委員会（静岡・滝浪龍司）	情報交流事業の拡充強化等 教材用木材標本の寄贈事業等 賃金・退職金、労務環境の改善等 中央会「ビジョン調査事業」への対応
1993(平成５)	組織再編強化委員会（天竜木産・伊藤公雄） 広報力強化委員会（天竜木産・伊藤昭三） 新 JAS 推進委員会（清水港・村松俊介） 素材生産部会（初代部会長　静岡・牧野平四郎）	業態別専門部会の設置等 ビデオ「森林とみんなの暮らし」の全県一斉配布等 新 JAS の普及推進活動等 平成５年３月設立（会員201名）以後、常設部会
1994(平成６)	総務委員会（天龍・村越省吾） 広報委員会（浜松・古橋康良） 木材産業ビジョン策定委員会（田方・髙橋昭博）	会員動態調査に基づく会費負担方法の検討等 PR活動の中期計画策定等 「木材産業ビジョン静岡」の策定等
1995(平成７)	組織機能委員会（天竜木産・戸田尚男） 広報委員会（太田川・中山進義） 木材産業ビジョン推進委員会（天龍・渥美友茂）	震災後の施工者支援対策等 震災後の軸組工法の復権PR等 「木材産業ビジョン静岡」の具現化等
1996(平成８)	組織委員会（清水港・神谷雄介） 木材ＰＲ実行委員会（清水港・鈴木通之）	「業態別部会」の設置等 全県新聞広告の掲載等
1997(平成９)	業態別部会の検討委員会（清水港・神谷雄介） 木材ＰＲ実行委員会（天龍・渥美隆一郎）	部会設置等の単協アンケート調査等 新聞広告の実施、木の日催事の再検討等
1998(平成 10)	地域住宅産業推進事業開発委員会（委員長選任せず）	地域住宅産業推進事業への対応等
1999(平成 11)	組織再生委員会（静岡・滝浪 豊） 地域住宅産業推進事業開発委員会（委員長選任せず）	定款の全面見直し等 地域住宅産業推進事業の継続対応等
2000(平成 12)	定款検討委員会（静岡・滝浪 豊）	定款改正案の検討等
2001(平成 13)	改革委員会（静岡・影山弥太郎）	ダイオキシン(焼却処理)対策の検討等
2002(平成 14)	改革委員会（静岡・影山弥太郎）	木材業者登録規約の改正等
2003(平成 15)	活性化委員会（清水港・杉山陽一）	エコスクール運動の継続等
2004(平成 16)	活性化委員会（清水港・杉山陽一）	会費負担方法の見直し等
2005(平成 17)	振興対策委員会（天竜木産・鈴木良三）	情報化時代の人材育成と広報活動等
2006(平成 18)	振興対策委員会（天竜木産・鈴木良三）	「木の香り生体反応試験」の成果普及等
2007(平成 19)	活力再生委員会（天竜木産・鈴木良三）	組合法改正に伴う「共済事業部」の清算等
2008(平成 20)	活力再生委員会（富士宮・片岡博昌）	経営後継者緊急調査の実施等
2009(平成 21)	企画推進委員会（浜松・中村泰平）	「後継者塾」の開講・運営等
2010(平成 22)	企画推進委員会（静岡・滝浪龍司）	国産材担当理事の選任等
2011(平成 23)	木材産業振興対策委員会（島田・柳川真佐明）	大型工場誘致・進出問題への対応等
2012(平成 24)	木材産業振興対策委員会（島田・柳川真佐明）	製材・加工体制の将来像検討等
2013(平成 25)	公共納材検討委員会（静岡・滝浪龍司）	単協窓口の公共納材検討等

2014(平成 26)	モノづくり検討委員会（島田・柳川真佐明） 県産材証明制度運用見直し検討委員会（委員長選任せず）	垂直・水平連携の強化等 県外委託加工の運用見直し等
2015(平成 27)	地域製材ネットワーク化委員会（富士宮・勝又重政） しずおか県産材ＰＲ委員会（静岡・滝浪龍司）	アドバイザー派遣事業への対応等 26 年度補正事業への対応等
2016(平成 28)	地域製材ネットワーク化委員会（天竜木産・石野秀一） しずおか県産材ＰＲ委員会（静岡・影山秀樹）	ネットワークづくり促進事業への対応等 27 年度補正事業への対応等
2017(平成 29)	地域製材ネットワーク化委員会（田方・増島光一） しずおか県産材ＰＲ委員会（御殿場・長田弘司）	ネットワークづくり促進事業への対応等 28 年度補正事業への対応等
2018(平成 30)	県産材需要促進委員会（掛川・鈴木正三） 品質規格検討委員会（島田・柳川真佐明）	県産材販路拡大への対応等 JAS 構造材利用拡大事業への対応等
2019(令和元)	販路開拓委員会（静岡・佐野賢輔） 組合組織検討委員会（島田・川村右介）	県産材製品需要拡大戦略の検討等 組合再編・会費負担・後継者問題への対応等
2020(令和２)	新販路開拓委員会（浜松・渥美慎太郎）	品質の高度化、新販路の開拓等

● ブロック会議・移動けん木れんの歩み（1988-2020）

年度	県木連 会長（所属）	（西部地区） 同 副会長（所属） 開催地	（中部地区） 同 副会長（所属） 開催地	（東部地区） 同 副会長（所属） 開催地
1988 (昭和63)	川口清俊（田子浦）	稲勝哲夫（天　龍） 森町・森町商工会館	髙橋孝三（島　田） 御前崎町・御前崎観光ホテル 静岡市・静岡木材会館 焼津市・ホテルアンビア松風閣 静岡市・クーポール会館	杉山修一（沼　津） 大仁町・伊豆洋らんパーク 伊東市・伊東園ホテル
1989 (平成元)	〃	〃 浜松市・プレスタワー 浜松市・サンビーチ浜松	〃 静岡市・三笑亭	〃 未開催
1990 （2）	〃	〃 浜松市・天龍木協	〃 清水市・羽衣ホテル	〃 富士市・田子浦港木協
1991 （3）	髙橋孝三（島　田）	〃 天竜市・林業会館	村松幸一（清水木産） 金谷町・ゆくら 清水市・木材ビル	〃 富士宮市・富士宮木協 御殿場市・御殿場木協 裾野市・松富
1992 （4）	〃	〃 浜松市・天龍木協 天竜市・北遠農林事務所	〃 本川根町・ニュー久保山	〃 三島市・雅叙園ホテル
1993 （5）	〃	〃 浜北市・県立森林公園森の家 天竜市・林業会館 浜北市・県立森林公園森の家 浜北市・県立森林公園森の家	〃 御前崎町・御前崎グランドホテル	横山開一（沼　津） 熱海市・金城館
1994 （6）	〃	〃 磐田市・開筵楼	〃 島田市・萬露亭	〃 沼津市・沼津軒
1995 （7）	〃	梅林利彦（天竜木産） 天竜市・林業会館 天竜市・林業会館	牧野平四郎（静　岡） 焼津市・焼津グランドホテル	〃 富士市・パルティール富士平安閣
1996 （8）	牧野平四郎（静　岡）	〃 浜松市・浜松木協 天竜市・林業会館	新間溥二（清水木産） 静岡市・三笑亭本店 清水市・割烹玉川楼	〃 沼津市・沼津木協 富士宮市・高砂殿
1997 （9）	〃	〃 未開催	〃 金谷町・夢づくり会館	〃 御殿場市・ブケ東海御殿場
1998 (10)	〃	〃 天竜市・林業会館	〃 清水市・木材ビル	〃 裾野市・松富
1999 (11)	〃	〃 未開催	〃 藤枝市・小杉苑	〃 伊東市・ラヴィエ川良
2000 (12)	〃	〃 天竜市・林業会館	〃 静岡市・ブケ東海静岡	〃 大仁町・伊豆洋らんパーク
2001 (13)	新間溥二（清水木産）	内山芳朗（天竜木産） 未開催	柳川金雄（御前崎） 清水市・割烹芳川	稲葉 進（田　方） 三島市・ブケ東海三島
2002 (14)	〃	〃 浜松市・県西部地域地場産業振興センター	〃 未開催	〃 未開催
2003 (15)	〃	〃 未開催	影山弥太郎（静　岡） 金谷町・ゆくら	〃 沼津市・沼津東急ホテル

2004 (16)	**新間溥二（清水木産）**	**今泉正男（浜　松）** 未開催	**影山弥太郎（静　岡）** 川根町・笹間渡温泉	**村上鳥雄（田　方）** 富士宮市・ペアステージ ノイ
2005 (17)	**杉山陽一（清水木産）**	〃 天竜市・林業会館 浜松市・県西部地域地場産業振興センター	**神谷雄介（清水木産）** 未開催	**菅沼 久（御殿場）** 富士市・パルティール富士平安閣
2006 (18)	〃	〃 浜松市・県西部地域地場産業振興センター	〃 島田市・萬露亭	〃 御殿場市・クレアシオン M
2007 (19)	〃	〃 浜松市・県西部地域地場産業振興センター	〃 焼津市・焼津グランドホテル	〃 長泉町・長泉山荘
2008 (20)	〃	〃 浜松市・研修交流センター	〃 静岡市・浮月楼	〃 伊豆の国市・伊豆洋らんパーク
2009 (21)	〃	〃 浜松市・研修交流センター	**近藤吉典（志　太）** 静岡市清水区・千年成	**片岡博昌（富士宮）** 三島市・みしまプラザホテル
2010 (22)	〃	〃 浜松市・研修交流センター	〃 島田市・川根温泉ふれあいの湯	〃 沼津市・KKR 沼津はまゆう
2011 (23)	〃	**内山 弘（天竜木産）** 浜松市天竜区・納涼亭	〃 島田市・割烹旅館魚一	〃 富士宮市・フォレストヒルズ
2012 (24)	**片岡博昌（富士宮）**	〃 浜松市・紅すずめ	〃 焼津市・焼津グランドホテル	**芹澤孝寿（御殿場）** 御殿場市・名鉄菜館
2013 (25)	〃	〃 掛川市・大日本報徳社	**滝浪龍司（静　岡）** 静岡市・滴翠庵 翠峰	〃 裾野市・和風レストランみよし
2014 (26)	〃	〃 浜松市・天竜膳三好	〃 静岡市・割烹芳川	〃 伊東市・ホテルニュー岡部
2015 (27)	**内山　弘（天竜木産）**	**川合重信（浜　北）** 浜松市・割烹旅館 朝陽館	〃 島田市・川根温泉ホテル	**横山貞治（沼　津）** 三島市・みしまプラザホテル
2016 (28)	〃	〃 浜松市・オークラアクトシティ浜松	〃 焼津市・ホテルアンビア松風閣	〃 沼津市・ニューウェルサンピア沼津
2017 (29)	**滝浪龍司（静　岡）**	**伊藤晴康（天竜木産）** 浜松市・ホテルクラウンパレス浜松	**福島　覚（清水木産）** 静岡市・三笑亭本店	〃 富士宮市・富士宮グリーンホテル
2018 (30)	〃	〃 掛川市・大日本報徳社	〃 静岡市・清水グランドホテル	〃 御殿場市・時之栖
2019 (令和元)	〃	〃 浜松市・ホテルコンコルド浜松	〃 島田市・魚一	**田代　功（裾　野）** 裾野市・みよし
2020 (2)	〃	〃 担当組合：浜北木協 （新型コロナ禍により1年延期）	〃 担当組合：志太木協 （新型コロナ禍により1年延期）	〃 担当組合：田方木連 （新型コロナ禍により1年延期）

注）① ブロック会議（地区協議会）

名　称	西部：西部地区木協連絡協議会、中部：中部地区木協懇話会、東部：東部木材業者懇談会
代表者	3地区統括の副会長

② 移動けん木れん：平成11年度より、上記①ブロック会議との併催。

22 業界のシンボル ～ 県民公募の愛称は「もっくん」(1988)

「もっくん」は、県の鳥・サンコウチョウをモデルに作成した本会のシンボルキャラクターである。1988(昭和 63)年度広報委員会(鈴木良介委員長)の提案で、静岡新聞紙上にて愛称を公募した結果、県下一円から 500 件余の応募があった。親しみやすい、呼びやすいなどの理由で「もっくん」に決定し、現在では四季・生活・スポーツ等幅広いジャンルで約 100 種のデザインパターンがあり、今日まで 30 年余にわたり「本県木材業界の顔」として PR に活躍している。

各種イベント用に作成した「もっくんの着ぐるみ」は、「住まい博・住宅展」や県内各地で開催された移動木工教室「トンカチ号」などで大活躍し、ちびっ子に大人気となった。その後、2005(平成 17)年度には、新間溥二会長のもと正副会長会議の協議を踏まえ、「人の健康(Kenkou)を育み」、「子供の教育(Kyouiku)に役立ち」、「地球の環境(Kankyou)を守る」という、キャッチフレーズ「木で３K！」が提唱され、理事会決議を経て現在の「３K 運動」に至っている。

▲木で３K! 運動 PR チラシ

▲もっくんの着ぐるみは、各種イベントで大人気！

➤**関連広報：**キャラクターの愛称公募（広報もくれん第 69 号）
PR 動画「木で３K！」の公表（本会ホームページ）

23 森を愛するカレンダー
～ 創立 50 周年記念事業（2000）

2000(平成 12)年度、創立 50 年を迎えた本会では PR 事業の一環として大型インテリアカレンダー（B1 サイズ・1,030 ㎜×728 ㎜）1,500 枚を作成した。カレンダーには抽選用の通しナンバーを入れ、当時の会員事業者約 1,000 社と関係行政、団体等、日頃ご支援をいただいている皆様方に配布した。なお、一般の希望者にも実費配布し、この収益の一部を「緑の募金」に寄付した。

大木にアカゲラを配したオリジナルイラストでデザインされた「森を愛するカレンダー・LOVE　FOR　FOREST 2000」は、理事会の席上抽選会を行った結果、香港ペア旅行券、温泉旅行券、国内旅行券、食事券、図書券、高級煎茶など 133 者が当選し、各種の記念品を贈呈した。あわせて、静岡経済研究所から講師を招聘し、「変革期を切り拓く経営者像」をテーマとする記念講演会と祝賀懇親会を開催した。

▲50 周年記念ロゴマーク

▲森を愛するカレンダー
LOVE FOR FOREST 2000

➤**関連広報：**海外旅行、当選者決定！（広報もくれん第 209 号）

24 雇用問題、この30年

~「3K職場」の実態調査と「働き方改革」、外国人技能実習制度(1989＆2019)

1989(平成元)年、高齢化が進み雇用状況が厳しさを増すなか、将来の若年労働力の雇用安定の基礎作りをはかるため県木連に作業環境整備検討委員会(馬渕孝委員長)が設置された。同委員会では業界実態を把握するため、静岡大学農学部・鈴木滋彦 助手のご協力を得て、1,287 社の全組合員を調査対象とし業態別に従業員数、従業員の年齢と就業年数、年間就労日数、最近5年間の新卒採用の実態等に係る「作業環境・雇用実態調査´89」を実施し、55%・702社から回答を得た。

本調査の特徴のひとつは、702社に勤務する6,711名全員の年齢および就労年数を調査した点であり、その概要は下表のとおりである。

「年間就労日数」については、調査前年に法定労働時間の短縮を中心とする労働基準法が改正されたため、天候、季節的な影響を受ける素材生産業210日弱は別枠扱いとして、当時の旺盛な建築着工を背景とし、建築工事業の288日を筆頭に、木材流通業・製材業は284日、総平均は279日となった。今後の対応については、7割弱が「現状のまま」の回答であり、平成3年3月末までの克服課題である週 46 時間制への移行を完了し、「当面は現状維持で」との経営者の意向が伺われる回答結果となった。

● 作業環境・雇用実態調査´89

(業態別の事業体数および従業員数の年齢、就労年数、年間就労日数)

区　分	製材業	木材流通	素材生産	建築工事	その他※	全　体
事業体数	424	115	62	22	79	702
(%)	(61)	(16)	(9)	(3)	(11)	(100)
一社当たり平均従業員数	8.7	8.5	4.7	12.0	19.0	9.6
平均年齢(歳)	50.3	38.6	52.2	42.8	47.7	47.9
男　性	50.5	40.0	52.8	43.2	46.9	48.1
女　性	49.5	34.2	48.9	41.3	49.0	47.0
平均就労年数(年)	14.8	10.1	18.1	11.3	11.1	13.3
男　性	15.7	11.2	18.9	11.8	11.8	14.3
女　性	12.2	6.8	13.9	9.6	9.9	10.7
年間就労日数(日)	284	284	210	288	286	279

※その他11%は、木工業(組み立て式簡易家具を含む)、集成材製造業、木材チップ業など

30年余を経たいま、改めてこの調査結果を見返してみると、1社あたり9人強の雇用、従業員年齢の総平均は48歳弱、就業年数は13年余であり、直近の会費算定のための会員動態調査をみると 1 社あたりの雇用者数は6名弱となり、この間の業容の変化を色濃く映す結果となっている。また、平均年齢については、昭和57年度に厚生年金基金制度調査委員会(望月栄太郎委員長)が検討指標を集約するため実施した予備調査では46歳となっており、その後の 7 年間で着実に高齢化が進行したことが再確認された。

この調査を通じ、「求人難と高齢化に悩む木材業の一断面」が浮き彫りになったが、当時、中小製造業の雇用環境は「３K」(きつい・汚い・危険)と言われ、この汚名を払拭するためにも雇用条件の改善は必須課題と指摘された。

一連の調査結果を踏まえ一部単協や会員企業では「年間稼働日数表」の合意形成、集約周知が行われ、その後の法改正を踏まえ徐々に週休２日制への移行が進行し、今日の週 40 時間制へと繋がっている。

いま我が国は、歯止めのかからない少子高齢化に伴う生産年齢人口の減少、育児や介護との両立など、働き手のニーズが多様化し大きな変革期にある。これらの課題解決のため、国は 2019(平成 31)年４月から順次「働き方改革関連８法」(①労働基準法、②労働衛生安全法、③労働時間等の設定改善特措法、④じん肺法、⑤雇用対策法、⑥労働契約法、⑦短時間労働者の雇用改善法、⑧労働者派遣事業の適正運用の確保・派遣労働者の保護法）を施行した。残業時間の上限規制、有給休暇の確実な付与等、改革法の施行に伴う労働時間制限が人手不足を助長し、木材業界にあっては、原燃料や人件費、配送コストの上昇が経営圧迫要因となり、建材等値上げの動きが相次いだ。

併せて同年 ４ 月より新たな在留資格「特定技能」を新設する「改正出入国管理法」が施行され、人材不足が深刻な 14 業種を対象に、一定の技能と日本語能力のある外国人に日本での就労を認める単純労働での外国人材活用に門戸を開くこととなった。

さかのぼって、2017(平成 29)年 11 月「外国人の技能実習の適切な実施及び技能実習生の保護に関する法律」の改正後、機械保全、建築大工等の職種で外国人技能実習生を受け入れていた製材工場が関連機関より職種と実習の内容が異なっている等の指摘を受けるようになった。木材業界では一部の地域、業種からの強い要請を踏まえ、全木連が中心となり「外国人技能実習生の受け入れ状況等アンケート調査」、実習生受け入れ会員への「現地調査」の結果を踏まえ、製材部門への外国人労働者の受入れに向け、全木連傘下の賛同者による「外国人技能実習部会」が設立され、独自の「外国人材技能実習制度」が動き出した。

この先、2019(令和元)年度を振り返った時、翌年の「新型コロナウイルス」のインパクト、「働き方改革関連法」と「改正入管法」が我が国の労働市場の構造を変えた「大きな曲がり角であった」と認識されることになるのだろうか。

25 素材生産の夜明け ～ 素材生産部会の発足と人づくり基金（1993～）

県内の森林資源の充実を踏まえ、素材生産における経営基盤の確立と労働者の安全確保と雇用安定等の諸問題に対処し、斯業の活性化と社会的地域の向上をはかるため、1993(平成 5)年 3 月、賛同者 201 社により県木連の「素材生産部会」が発会し、初代部会長には静岡木材業協同組合の牧野平四郎理事長が就任した。設立目的を達するため、同部会では歴代部会長が中心となり、労働災害の防止、労働力の確保、生産性の向上、生産コストの低減、経営基盤の確立と経営の安定、会員相互の親睦と福利厚生の充実につとめ、特に学識者、専門技術者等の講師を招聘した木材需給の動向と国産材供給体制に係る各種研修会、全国各地の先進林業地等への視察会等が積極的に開催された。

当時、自治省・国土庁・農林水産省の三省庁による森林山村検討会が森林整備の担い手対策の推進のための基金設置を提言し、静岡県も 1994(平成 6)年度から「森林(もり)を守り育てる人づくり基金」(人づくり基金)を設置することとなった。設立時の基金の調達は、県から 10 億円、業界寄付金 1 億円（県森連 6,000 万円、県木連 4,000 万円)となったが、県木連では素材生産部会が中心となり、林業作業員を雇用している事業者、基金の趣旨に賛同する事業者等から寄付金を募り、寄付行為を達成した。静岡県では優秀な林業作業員を確保するため、人づくり基金の運用益を活用した「森林を守り育てる人づくり推進事業」が実施され、静岡県林業労働力確保支援センター(事務局：公益社団法人静岡県山林協会)を助成申請窓口とし、今日まで就業条件向上対策、若年新規林業作業員特別共済等の各種支援事業が実施されており、同部会がこの受け皿組織となっている。

この間、1997(平成 9)年度には、斯業の将来を見据え、林業事業体協業化等の促進をはかるための調査事業とこの報告書「丸太生産の夜明け」の集約、普及啓発報告会を開催するとともに、毎秋定期開催される「静岡県優良素材展示即売会」における出材協力、関連団体と連携した労災防止活動等を進めている。

今後、間伐から主伐再造林へ移行するにあたり、今一度、部会設立の原点に立ち返り、その使命を再確認することが求められている。

➤**参考資料：**丸太生産の夜明け～林業事業体協業化等促進事業報告書(平成 10 年 3 月)静岡県木材協同組合連合会

➤**関連広報：**国産素材の供給力向上を（広報もくれん第 125 号）

● 静岡県木材協同組合連合会　素材生産部会　歴代部会長

就任期間	氏　名（所属木協）
1993（平成５）～1995（平成７）年度	牧野平四郎（静岡）
1996（平成８）～1999（平成 11）年度	柳川　金雄（金谷）
2000（平成 12）～2006（平成 18）年度	内山　　弘（天竜木産）
2007（平成 19）～2008（平成 20）年度	菅沼　　久（御殿場）
2009（平成 21）～2012（平成 24）年度	今井　保隆（天竜木産）
2013（平成 25）～2018（平成 30）年度	狩野　正明（静岡）
2019（令和元）年度～	落合　大樹（島田）

静岡県木材協同組合連合会　素材生産部会会則

制定　平成5年3月22日、最終改正　平成20年4月1日

（目　的）

第１条　この会則は、本会が定款第52条（部会）の規定により設置する素材生産部会の運営等について必要な事項を定め、もって素材生産における経営基盤を確立し、労働者の安全確保と雇用の安定等、諸問題に対処するため、会員相互の連携をはかり、業界の活性化と社会的地位の向上に努めることを目的とする。

（名　称）

第２条　この会は、静岡県木材協同組合連合会素材生産部会と称する。

（事務所の所在地）

第３条　この会は、事務所を静岡市葵区追手町９番６号静岡県木材協同組合連合会内に置く。

（事　業）

第４条　この会は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

（１）　労働災害防止並びに労働力確保
（２）　生産性の向上並びに生産コストの低減
（３）　経営基盤の確立並びに経営の安定
（４）　会員相互の親睦と福利厚生
（５）　関係行政機関・関係団体との連携並びに協力
（６）　森林を守り育てる人づくり基金に関する事業
（７）　その他、目的達成に必要な事業

▲発会式の記念テレフォンカード

（会　員）

第５条　この会の会員は、静岡県木材協同組合連合会傘下の素材生産業を営む者とする。

（役　員）

第６条　この会に次の役員を置く。

部会長　1名、副部会長　3名、幹事　20名以内、顧問並びに相談役　若干名

（役員の任期）

第７条　役員の任期は、２年とする。

（会　議）

第８条　会議は、役員会と総会とする。

２　役員会は、部会長・副部会長・幹事をもって構成し必要において部会長が招集する。

３　総会は、毎年５月末までに開催する。

（会　計）

第９条　この会の経費は、会費・寄付金等をもってあて、会費額は総会において決定する。

２　会計年度は、４月１日から翌年３月31日までとする。

ただし平成17年度は６月１日から３月31日とする。

（附　　則）

この会則は、平成５年３月22日より施行する。

２　第４条(６)の森林を守り育てる人づくり基金に関する事業については別に定める。

３　その他この会則に定めのないもので、部会において必要と認めるものは別に定める。

26 「第５の外材」その産地を訪ねて ～ 北欧木材産業の視察調査（1994）

環境保護運動の高まり等により、海外産地の丸太輸出規制や価格が高騰するなか、円高の定着と相まって価格が高騰したカナダ産 SPF(スプルース・パイン・ファー)の代替として、北欧からの木材輸入が漸増した。事実この時期、北欧諸国、オーストリア、ドイツ等欧州からの製品輸入は 1993(平成 5)年の 25 万㎥が年々増加し、2002(平成 14)年には 246 万㎥と 10 倍に急増し、米加製材品は 764 万㎥から 386 万㎥へと激減している。

このような背景のもと、1994（平成６）年８月、髙橋孝三会長を団長とし、米材、南洋材、北洋材、ニュージーランド材に続く「第５の外材」として急浮上したスウェーデン、フィンランド北欧２ケ国の産業視察を実施した。

▲視察報告書（写真：フィンランド伐採現場で）

▲ボスニア湾に浮かぶ輸出専用船を背に(スウェーデン)

訪問した両国は、7～8 割が森林という世界有数の森林国である。両国滞在中、15 名の視察団は、森林伐採現場、製材、集成材、合板、パーティクルボード、ファイバーボード、建材・住設機器・ログハウス展示場等、8 社延べ 15 カ所の現場視察を行ない、20 余名の経営者、現場責任者と面談した。麦畑に連なる平坦な林地で行う伐採作業は、2 人 1 組のチーム、2 交代で 300～400 ㎥/日の生産性に驚愕し、工場残材を活用したバイオマスボイラーによる乱尺積みの木材乾燥は 18%以下が常識など、管理の行き届いた豊かな森林資源を背景とし、「ヨーロッパの工場」を自認する両国の輸出主導の多様な木材産業の広がりと、旺盛な企業家精神に触れることができた。フォークローダー等大型荷役車、合板等の生産ライン、検品業務等あらゆるところに女性が進出していたが、それもこれも託児・老人介護施設の完備した福祉先進国家と同一職種・男女同一賃金のなせる技であろう。いきいきと働くウーマンパワーが随所に見受けられたのも強く印象に残った。

視察会には、商談目的で参加した外材製材、木材販売会員だけでなく、素材生産、国産材製材会員の参加もあり、期間中の相互交流も意義あるものとなった。なお、視察計画の立案には両国の在日大使館、産地事情に通じた会員から関連情報を入手するとともに、現地では複数の木材商社に現地案内をお願いし、8 日間の短期視察ながら充実した内容となり、帰国後は会員に向け「視察報告会」が開催された。今ではホワイトウッド(オウシュウトウヒ)、レッドウッド(オウシュウアカマツ)として市場に定着した北欧材輸入の草創期における県木連事業のひとつである。

➤**関連情報**：'94 北欧木材産業視察報告書（1994 年 11 月）

➤**関連広報**：多様な木材産業のひろがり（広報もくれん第 143 号）

27 1.17 阪神大震災余話 ～ 実大振動実験「強さの実証、倒壊の反証」（1995）

▲震災現地調査から・高速道路の倒壊（兵庫県神戸市）

▶広報もくれん「震災現場調査」リポート

1995(平成 7)年 1 月 17 日早朝、M7.3 の大地震が阪神地域で発生した。死者 6,400 余名という未曾有の大災害、想定外の事態続出で建築・土木業界はじめ社会全体が大きな衝撃を受けた。高速道路の橋脚の座屈、市街地ビルの圧壊、家屋の倒壊、火災発生と延焼等、今でも壮絶な報道画像が目に焼き付いている。東海地震の発生が危惧される本県の実状に鑑み、本会では県と連携し、2 月初旬、静岡大学農学部・平嶋義彦助教授を団長に、県内の設計、施工、木材業界のプロジェクトチームにより、神戸市東灘区・灘区の「震災現地調査」を実施した。「平衡感覚を失う」、「残酷な新旧コントラスト」など「広報もくれん」迫真の現場レポートの見出しからは、四半世紀を経た今でも被災現場の惨状が鮮やかに蘇ってくる。

▼震災現地調査から・木造住宅の圧壊（兵庫県神戸市）

▲木造住宅の実大振動実験（香川県多度津町・(財) 原子力発電技術機構）

また、本会では傘下単位木協と連携のもと被災地に向け、全木連、日本赤十字社を介しすみやかに見舞金、義援金を贈るとともに、大震災により損なわれた木造住宅の信頼性の回復に向け、「強さの実証」と「倒壊の反証」のデータを収集するため、全国の木造・木材関連業界が結束し、同年 11 月、香川県多度津町の(財)原子力発電技術機構で実施された木造 2 階建て住宅「実大振動実験」に係る協力金 85 万円を拠出した。

県内では震災現場調査ならびに振動実験の報告会を開催し、被災実態を踏まえた対策等を内部広報し事態の鎮静化につとめるとともに、一般市民に向けては「住まい博・住宅展」等のイベントにおいて地域研究機関と連携した科学的な「ミニ耐震実験」の実施、設計・施工者向けの技術資料「Hand book・耐震設計＆JAS」を作製配布するなど、木材・木造住宅に対する正しい理解の浸透につとめた。

➤**関連広報：**阪神大震災現場調査レポート（広報もくれん第 148 号）
木造住宅振動実験レポート（広報もくれん第 158 号）

28 ダイオキシン・ショック ～焼却処理問題への対応（1997~）

1960 年代から 70 年代初頭における田子の浦港のヘドロ問題を例に挙げるまでもなく、製造業にとって終末処理問題は円滑な事業継続を進める上で重要事項である。近年、「経済規制」が緩和されるなかにあって、環境保全、安全確保に対する社会的要求は高まり「環境規制」は年々強化され、「木材は環境に優しい、安全な資材であり、究極の環境資源」と主張してきた木材業界との間で軋轢が生じてきた。

焼却炉については、1997(平成 9)年から「廃棄物の処理及び清掃に関する法律」(廃掃法)が改正・施行され、1999(平成 11)年には議員立法による「ダイオキシン類対策特別措置法」(ダイオキシン法)の制定など、環境保全のための規制が強化されることとなった。市街地工場の焼却処理、焼却灰の処理等は生産コストに直接影響し、木材産業は一層苦しい経営を余儀なくされた。

県木連では傘下会員の窮状を踏まえ、焼却物の安全性を確認するため、2001(平成 13)年度には改革委員会(影山弥太郎委員長)を設置、行政機関に届け出された会員焼却炉の実測調査を実施して新たな規制値をクリアすることを確認、この結果を全木連に報告し、原木・木屑・樹皮等ダイオキシンの発生と直接的な関係が少ない焼却炉の規制適用除外等を関係機関に繰り返し要請した。

▲ダイオキシン対策研修会の開催
（講師：東京大学・渡辺正教授）

2003(平成 15)年度には専門講師を招聘して「ダイオキシン問題を考える」対策研修会を開催し、科学的な指標に基づく対策情報の提供に努めた。

2001(平成 13)年、廃掃法の改正に際し、再度ダイオキシン類の発生が極めて少ない製材工場の小型木屑焼却炉の規制対象除外を要請した結果、施行期日を 1 年半延長できたものの、1997(平成 9)年の廃掃法改正以降、全木連主導により要所、要所で実施した要請活動は実現には至らなかった。

▲木屑等の焼却処理は難渋、特に市街地工場は対応に苦慮、法改正で小型炉へ改修する会員も

その後、2002(平成 14)年において全木連は「木屑の適正処理・木質バイオマス検討委員会」を設置し、「木材産業における木屑処理の基本的考え方、対応方針」(中間報告)を集約し公表した。この中間報告に関連し、木材産業の小型焼却施設（火床面積 2 ㎡未満又は焼却能力 200 kg 未満/時）におけるダイオキシン類測定の合理化について要望活動を行ない、さらに「木質資源の 3 R」（Reduce・発生抑制、Reuse・再使用、Recycle・再生利用）推進について支援措置の拡充を要望した。

しかしながら、木材の焼却についての規制緩和は困難であり、焼却による処理コストは付加価値を生むことはないため、木屑処理＝焼却の概念から、木屑の発生を抑制する意識改革が重要であるとの対応方針に移行せざるを得ない状況となり、木質バイオマスエネルギー化、リサイクル化を優先的に考える現在の潮流に至っている。

焼却処理問題に関し、木材業界にとって忘れてはならないのが副産物の木材チップとオガ粉である。本会では、これに関連する 2 団体（静岡県木材チップ工業会と静岡県オガライト工業協同組合、後に静岡県オガライト工業会に改名）の事務を受託した。既に、両団体ともその使命を終え解散しており、本稿では詳細な記述は叶わないが、残存資料に基づき下記団体の概要を記録に留めておきたい。

【 静岡県木材チップ工業会 】

設　　立：昭和 34 年 11 月 3 日

解　　散：平成 23 年 6 月 17 日

主要事業：製紙各社との木材チップの取引方法の改善、販売価格ならびに需給調整、チップ工場の実態調査、視察・研修事業

歴代会長：下表のとおり。

▲平成 17 年度の木材チップ需給懇談会から

年度	会長（製紙系列）	年度	会長（製紙系列）
昭和 34～35	村松八郎（　—　）	平成元～ 2	妻形一夫（大　興）
36～37	柴田竹治（東　海）	3 ～ 4	山本　巖（大昭和）
38～39	山本　巖（大昭和）	5 ～ 6	佐藤　寛（東　海）
40～41	妻形一夫（大　興）	7 ～ 8	妻形一夫（大　興）
42～43	山本　巖（大昭和）	9 ～10	安間佑治（王　子）
44～45	柴田竹治（東　海）	11～12	山本正信（大昭和）
46～47	妻形一夫（大　興）	13～14	藤田武志（東　海）
48～49	山本　巖（大昭和）	15～16	佐野勝治（大　興）
50～51	村松幸一（東　海）	17～18	安間佑治（王　子）
52～53	妻形一夫（大　興）	19～20	〃
54～55	山本　巖（大昭和）	21～22	〃
56～57	河村　実（東　海）	23	〃
58～59	妻形一夫（大　興）		
60～61	山本　巖（大昭和）		
62～63	河村　実（東　海）		

➤**関連広報**：木屑燃料ボイラーと地域貢献 ～焼却炉問題を追う（広報もくれんNo.222）

29 森林につながる家づくり ～顔の見える家づくりネットワーク化のすすめ（1997～1999）

前掲№.6の「木質量産規格住宅」の対極ともいえる「地域固有の家づくり」の歩みを手繰れば、1983(昭和58)年、建設省(現国土交通省)の補助事業としてHOPE計画(地域住宅計画)が創設されたことを機に全国13市町村で独自の計画が策定され、地域の住文化に根ざした、先駆的な住まいづくり・まちづくりが実践された。

本県では「木のまち天竜市」が地域材を活用した住宅団地等の整備に取り組み、天竜木材産地協同組合の前身である二俣木材協同組合(尾上貞次理事長)が、天竜市土地開発公社の分譲による山王団地、大谷北団地で北遠地方の伝統的な住宅形式である釜屋(かまや)造りを現代風にアレンジした5タイプの「天竜の家」モデル棟を建設した歴史がある。

次いで、1985(昭和 60)年、本会会員有志と施工者で組織した静岡県木造住宅センター協同組合（友田和夫理事長）が、建設省「いえづくり'85プロジェクト」で特別優秀賞を受賞した「東海の家」の実践があり、これら地域の特性を生かした家づくりを推進する行政指針は、地域の中小工務店による長期優良住宅や低炭素住宅といった耐久性能や省エネルギー性能等に優れた木造住宅を支援する現在の「地域型住宅グリーン化事業」等に通底している。

▲HOPE計画・伝統的な釜屋造りの現代風モデル、同「天竜の家」山王団地

言うまでもなく、地域の木造住宅づくりの主流は、大工や工務店などの地域住宅産業である。その多くは昔からの木造軸組工法であり、大手住宅メーカーに等にくらべ、材料の標準化等の合理化が進んでおらず、現場生産性でも遅れをとっているのが現状である。

このような状況を踏まえ、本会では1997(平成9)年度「木質構法高度化推進事業」の一環として、木造建築に造詣が深い建築研究者、木構造設計者（東京大学・坂本功、工学院大学・宮澤健二、芝浦工業大学・藤澤好一、㈱増田建築構造事務所・増田一眞、㈱稲山建築研究所・稲山正弘、職業能力開発大学校・松留慎一郎、建設省建築研究所・河合直人、東京大学名誉教授・杉山英男の8氏)を対象に、木造軸組構法の課題や新たな展開方法等について訪問ヒヤリングを行なうと共に、半間サイズのスギ真壁構造パネル10種、24体の性能試験を実施し、施工手間の低減、軸組木質部材の開発等、翌年度以降の事業推進の方向性を探った。

これを踏まえ、翌1998(平成10)~1999(平成11)年度の2年間、県住宅課のご指導のもと建設省からの助成を得て「地域住宅産業推進事業」に着手した。事業の狙いは、天竜流域において「森林につながる家」を実現するための設計者・施工者・木材業者のネットワーク化と関連技術の開発であった。事業の推進は、名古屋大学・平嶋義彦 教授、筑波大学・安藤邦廣 教授を顧問とする本会の「地域住宅産業推進事業開発委員会」が行い、地域産業界からは若手の設計者・施工者、木材業界からはテンダス(天竜材を世に出す会)等若手3名、県からは建築、林業両部局のスタッフに委員参加をお願いした。初年度は、「森林につながる家」の理念、ならびに3タイプ（天竜

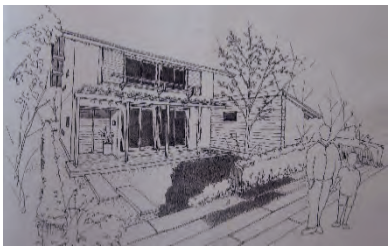
人組の家、大空間の家、通し貫構法の家)の「基本設計」を取りまとめ、これに関連した一間サイズのスギ厚板、スギ３層ボード、構造用合板、石膏ボードの４種、８体の耐力壁等の性能試験を県林業技術センター統括のもと実施した。

「産官学体制」による２年目の開発事業では、① ９種、16 体の「貫構造耐力壁の性能試験」の実施、②「森林につながる家づくり」の天竜版仕様書ともいうべき「標準設計」、③ モデル住宅の施工に伴う「実施設計」の３項目を通じ、理念・検証・実践を行った。

このうち、耐力壁の性能試験については、もとより壁倍率等の評定を取得するものではなく、厚貫による通し貫構法と様々な壁面構成体とを比較検討することに主眼が置かれた。次に標準設計書では、前述性能試験の技術検証に加え、①天竜版特記仕様書（生産者、施工者、設計者の共通言語としての仕様書の作成)、②ディテールの作成（部材の整理、施工性の確認、性能の確保)、③通し貫構法の整理（試設計による検討）の３項目が総合的に整理された。特に、仕様書では､設計者側から見た時､標準的な木材の部材寸法と価格が分かりにくいという現状認識から、標準部材リストを整理し、参考価格も提示された。また、資材の受・発注に関し、木材生産者には、乾燥等品質管理と適正なストックを、他方設計者には、標準部材の使用と適切な納期を確保することが改めて確認された。

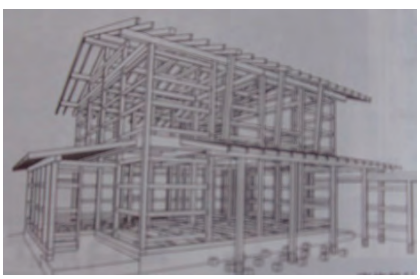
最後に、標準設計、性能試験を踏まえた「実施設計」と「試験施工」(現浜松市北区細江町、敷地 50.61 坪、木造２階建て、延べ床面積 35.80 坪)は当初予定どおり実施された。

● 森林につながる家づくり ～地域住宅産業推進事業



▲基本設計（左から、天竜人組の家、大空間の家、通し貫構法の家）

▲貫構造の性能試験
（相模原市・職業能力開発総合大学校）



▲実施設計・３次元架構図

▲試験施工・モデル住宅 PR 資料

▲家づくりネットワークの仕組み

▲産官学体制の開発委員会（浜松市）

折しも 2000(平成 12)年 4 月より、「住宅の品質確保の促進等に関する法律」(品確法)が施行され、その後 2009(平成 21)年からは「特定住宅の瑕疵担保責任の履行の確保等に関する法律」(住宅瑕疵担保法) が施行されるなど、関連業界には品質管理の厳格化と建築情報の適切管理と開示等が強く求められることとなった。一連の事業を通じ木材の生産・加工・流通・利用の各段階で断絶している情報の一元化に向け、建て主から信頼される「顔の見える」ものづくりの重要性と、地域社会に密着した「我々にしかできないこと、我々だからできること」を見出し、整理・検証していくことの大切さが再確認された。

30 シックハウス、シックスクール問題への対応（1998～2001）
～ 新築住宅 44 棟のホルムアルデヒド計測調査

新築・改築後の住宅やビルなどの新築・リフォームの入居後、倦怠感・めまい・頭痛・湿疹・のどの痛み・呼吸器疾患など、さまざまな体調不良が生じる事例が急増した。これらは、住宅では「シックハウス症候群」、学校では「シックスクール症候群」と呼ばれ、厚生労働省、国土交通省においても対策が進められた。室内空気汚染にかかわる健康問題、いわゆる「シックハウス問題」は、1996（平成 8）年に始まった官民共同研究「健康住宅研究会」で本格化し、その後「室内空気対策研究会」に継承され具体的な対策に向け、広範な研究がスタートした。

体調不良は、建材や塗料などから揮発した化学物質による室内の空気汚染が原因と指摘されたため、本会では 1998(平成 10)年、静岡大学農学部と連携し一般向けＰＲ資料「もくもくドクターの室内空気汚染クリニック」を発行し啓発活動に努めた。次いで 2000(平成 12)年には、静岡大学農学部(吉田弥明教授、名波直道助教授、渡邉拡助教授)のご指導を得て、県内の入居直前の新築木造住宅 44 棟(軸組工法 38 棟、枠組壁工法 6 棟)を調査対象とし、居間 38 室(軸組 33 室、枠組 5)、寝室 44 室(軸組 39、枠組 5)の計 82 室においてホルムアルデヒドの室内濃度を測定した。

この実測調査によって、厚生労働省の指針値をクリアしたのは約 25%となり、翌 2001(平成 13)年、一連の調査結果をＰＲ資料「静岡発けんこう新世紀」として集約発行、建築・設計・木材関連事業者、関連行政関係者等を対象とした調査報告会の開催、調査協力願った工務店等に計測分析データを提供し社内指針の見直しを願うなど、幅広い広報活動が展開され大きな反響を呼んだ。

木材界にとっては、木質系内装材料として、安全・安心の天然素材である無垢材を主体とする内装仕上げを推進するひとつの足がかりを得ることができた。

▲左から：PR パンフレット 2 種、計測調査（平成 12 年 7 月）、関連報道（平成 13 年 2 月）

➤関連情報：

調査報告書「新築木質系住宅のホルムアルデヒド気中濃度の実態とシックハウスに関するアンケート調査報告書」（平成 13 年 3 月）

PR パンフレット

・もくもくドクターの室内空気汚染クリニック ～健康住宅づくりへのステップアップ読本

・静岡発けんこう新世紀 ～ホルムアルデヒド濃度比較・新築住宅 44 棟のシックハウス度調査

➤関連広報：

・決め手は、内装仕上げ材料？ ～シックハウス試験速報レポート（広報もくれんNo.219）

・この結果、どう活かす？ ～新築木質系住宅の「シックハウス」ホルムアルデヒド気中濃度の実態調査（広報もくれんNo.224）

31 国産材・地域材の PR 活動 ～首都圏展示会への出展（2001～2002、2015～）

本編では、我が国最大市場である首都圏に向けた PR 展示会の歩みを記録に留めたい。国内森林資源の充実に伴い、木材と木材住宅・地域材の良さを PR することが全木連の呼びかけで開始され、これに呼応した木材産地が首都圏 PR に乗り出したのは 21 世紀初頭である。本会は 2001(平成 13)年、2002(平成 14)年のフェア、フェスティバルに出展し、地域研究機関、傘下会員組合と連携し「木材産地しずおか」を幅広く PR した。

催事名	概　　要
木と暮らしのフェア 2001	**（開期）**平成 12 年 2 月 11~12 日、**（会場）**東京ビッグサイト、**（来場者）**20,400 名、**テーマ**：21 世紀地域材再発見、**（展示概要）**全木連と 24 都道府県木連、業種別 20 団体等の連携出展。本会は「木の家 健康をまもる」をテーマに、静岡大学農学部と連携し「シックハウス現場試験」の結果、ヒノキ構造材、スギ内装材による新プレカットシステムを PR した。
木と暮らすフェスティバル 2002	**（開期）**平成 14 年 3 月 2~3 日、**（会場）**パシフィコ横浜、**（来場者）**19,100 名、**（テーマ）**木を暮らしに活かし、新しい木を育てよう、**（展示概要）**全木連と 7 県木連、12 中央団体等の連携出展。本会は「木を活かす、エコ&クリーン」をテーマに、会員 4 組合の協力を得てスギ・ヒノキでつくるプレカット軸組モデル、子供部屋、書斎、保育家具類、静岡型モデル木造住宅「森林につながる家」を PR した。

▲木と暮らすフェスティバル 2002（左）、木と暮らしのフェア 2001（中、右）

2015(平成 27)年度以降、全木連を窓口とした地域材、JAS 構造材、外構部材に係る助成事業における普及活動の一環として、静岡県ならびに会員事業者等と連携し共同出展を行ったが、上記 2 つの展示会との大きな違いは行政との連携密度である。ひとつは長年継続開催されてきた建築資材の総合展示会「ジャパンホームショー」であり、ふたつめは「2020 年東京オリンピック・パラリンピック」の開催を控え、東京都が日本各地との連携による産業活性化を謳い参加を働きかけ、2016(平成 28)年度から開始された地域材の PR イベント「モクコレ」への対応である。いずれの展示会も県と本会の連携、共催とし、県産材の建築諸資材、各種の家具類、インテリア小物等、量産型の産地ではない本県のアピールポイントを確かな品質、森林認証に絞り込み、

オール静岡体制のオープン展示で川上の森林・林業から川下の木材・木製品、家具・木工等に向けた「垂直連携」と、地域製材グループの「水平連携」による多彩な地域材の生産・供給体制をPRした。各展示会は、首都圏バイヤーに対する招聘事業で交流のある大手の設計事務所、ゼネコン等施工者、木材商社等に対しきめ細やかな事前告知を行うと共に、報道機関へのプレスリリースを行ない、各社の取材・報道の中、多くの来場を得て盛会裏に終了することができた。

催事名	概　　要
第 38 回ジャパンホームショー2015（第 10 回ふるさと建材・家具見本市）	**（開期）**平成 27 年 11 月 18～20 日、**（会場）**東京ビッグサイト、**（来場者）**18,528 名、**（展示テーマ）**ふじのくに 大きなやすらぎ しずおかの木
第 39 回ジャパンホームショー2016（第 11 回ふるさと建材・家具見本市）	**（開期）**平成 28 年 10 月 26~28 日、**（会場）**東京ビッグサイト、**（来場者）**36,557 名、**（展示テーマ）**ふじのくに 魅力発見！ しずおかの木
WOOD コレクション 2017（モクコレ 2017）	**（開期）**平成 29 年 1 月 19～20 日、**（会場）**東京ドームシティプリズムホール、**（来場者）**1,300 名、**（展示テーマ）**森林の都しずおか物語ショー・TOKYO×静岡の木
WOOD コレクション 2018（モクコレ 2018）	**（開期）**平成 30 年 1 月 30～31 日、**（会場）**東京ビッグサイト、**（来場者）**4,000 名、**（展示テーマ）**森林の都しずおか物語ショー・TOKYO×静岡の木
第 40 回ジャパンホームショー2018（第 13 回ふるさと建材・家具見本市）	**（開期）**平成 30 年 11 月 20～22 日、**（会場）**東京ビッグサイト、**（来場者）**27,184 名、**（展示テーマ）**ふじのくに 大きな夢組む しずおかの木
WOOD コレクション 2019（モクコレ 2019）	**（開期）**平成 31 年 1 月 29～30 日、**（会場）**東京ビッグサイト、**（来場者）**4,500 名、**（展示テーマ）**森林の都しずおか物語ショー・TOKYO×静岡の木
第 41 回ジャパンホームショー2019（第 14 回ふるさと建材・家具見本市）	**（開期）**令和元年 11 月 13～15 日、**（会場）**東京ビッグサイト、**（来場者）**27,252 名、**（展示テーマ）**ふじのくに 未来支える しずおかの木
WOOD コレクション令和元年（モクコレ令和元年）	**（開期）**令和元年 12 月 10～11 日、**（会場）**東京ビッグサイト、**（来場者）**4,200 名、**（展示テーマ）**森林の都しずおか物語ショー・TOKYO×静岡の木

▲会場受付配布パンフ（左から、ジャパンホームショー2016・同 2019、モクコレ 2017・同令和元年）

● 首都圏展示会への出展経過

ジャパンホームショー （ふるさと建材・家具見本市）	WOOD コレクション （モクコレ）
 ▲ジャパンホームショー2015	 ▲モクコレ 2017
 ▲ジャパンホームショー2016	 ▲モクコレ 2018
 ▲ジャパンホームショー2018	 ▲モクコレ 2019
 ▲ジャパンホームショー2019	 ▲モクコレ令和元年

32 組合を窓口とする諸制度の運用と組織の強化（2002~）

～ 登録制度と証明制度、県産材と合法木材の連携

2001(平成 13)年 12 月、県条例に基づく「木材業者登録制度」が廃止された。これを踏まえ開催された本会理事会において、一部の理事より組織強化の観点から登録制度の継続を求める声があがり、「業界自主登録制度」の立上げが検討された結果、翌 2002(平成 14)年 4 月から本会独自の木材業者登録制度が創設された。

同時期、県では森林資源の循環利用による森林の適正な整備をはかるため、「静岡県産材証明制度」を検討中であり、この制度運用が本会に打診された。種々協議を重ねた結果、本会の「木材業者登録制度」に基づく事業者登録を要件として、「静岡県産材証明制度」を本会が運用することで合意した。これを踏まえ以後、県の公共建築・土木事業に係る納材には、県産材証明制度に基づく「販売管理票」の添付が義務付けられることとなった。

また、品質の確かな県産材製品の供給を推進するため 2001(平成 13)年度に「しずおか優良木材認証制度」が創設された。この取組を需要面から推進するため 2002(平成 14)年度より「静岡県個人住宅建設資金」(10 年間の利子助成)の特化メニューとして「しずおか優良木材型」が創設され 3 年間運用された。その後、業界からの強い要請を踏まえ、2005(平成 17)年度から現行の「補助金方式」(建設時一括助成)となり段階的に予算が増額され、現在では「住んでよし しずおか木の家推進事業」として助成枠が年間 2 億円まで拡大し、県産材証明制度による管理された木材(県産材)と合法性の証明された原材料(合法木材)のダブル証明が支援制度の募集要件となっている。

▲しずおか木の家推進事業・PR パンフレット
「しずおか優良木材」シンボルマーク

これに先立つ 2000(平成 12)年 5 月、「国等による環境物品等の調達の推進に関する法律(グリーン購入法)が施行され、国、地方公共団体等では環境物品等の率先調達が開始された。本会では、(一社)全国木材組合連合会(全木連)の指導に基づき、林野庁が示したガイドラインに基づき「合法木材供給事業者認定制度」を創設し、この対応をはかった。

その後、地域材需要の喚気対策として 2013(平成 25)年度から 2 年間実施された「木材利用ポイント事業」、2018(平成 30)～2020(令和 2)年度の「JAS 構造材利用拡大事業」、2019(令和元)～2020(令和 2)年度の「外構部の木質化対策支援事業」等の国費事業においても助成対象材として「合法木材」が要件化されるなどの優遇措置が取られた。

▲「木材利用ポイント事業」PRバナー

東日本大震災に係る原発事故を契機とし、2011(平成 23)年「電気事業者による再生可能エネルギー電気の調達に関する特別措置法」(特措法)が成立し、翌年、特措法に基づき環境に負荷を掛けない太陽光、風力、水力、地熱、バイオマス等のエネルギーで発電した電力の買取価格を法律で定めるための「再生可能エネルギー電気の固定価格買取制度」(FIT 制度)が施行された。本会では未利用間伐材等の木質バイオマスのトレーサビ

リティを確保するため、2012(平成 24)年「木質バイオマス証明事業者認定制度」を創設し、組合員の事業活動を支援している。

本会が創設した木材業者登録、合法木材、間伐材チップ、木質バイオマスの 4 制度については、各々独自の「シンボルマーク」を定め、外部有識者による「認定審査委員会」を設置し信頼性・透明性の確保につとめるとともに、全木連、県、県森連等関連機関と連携し、認定事業者に対する研修事業、書面運用調査、現場モニタリング等を通じ、諸制度の的確運用を進めている。以上、別表の 5 制度は単位木協を申請窓口とし本会が制度運用を行っており、組合員の加入意欲の向上、アウトサイダーの加入促進等「組合求心力」を高める要として機能している。

● 合法木材・間伐材チップ・木質バイオマス事業者認定審査委員会「委員委嘱」の経過

年度	委嘱委員	年度	委嘱委員
平成 18	※祖父江信夫、白坂 進、小林明世	平成 26	※山田雅章、白坂 進、平野正道
19	〃	27	〃
20	〃	28	※山田雅章、白坂 進、高橋道安
21	〃	29	〃
22	〃	30	〃
23	〃	令和 元	※山田雅章、白坂 進、平野正道
24	※山田雅章、白坂 進、小林明世	2	〃
25	〃		

注）委嘱委員は、外部の有識者 3 名（※委員長：静岡大学農学部教授、県建築士会、木造建築組合）

▲合法木材、木質バイオマス認定事業者研修会の開催

▲合法木材、木質バイオマス現場調査の実施

● 組合を窓口とする「登録・証明・認定制度」について

1）静岡県木材業者登録制度

・創 設 日：平成 14 年 4 月 1 日
・創設＆運用：県木連
・目　　的：循環型社会にあって、安全で健康的な木材の安定供給をとおして、地球環境と地域社会に貢献する産業としての自助と地位の向上をはかるため、同業者の連携を強化する。
・登録業者数：558 社

2）静岡県産材証明制度

・創 設 日：平成 14 年 9 月 9 日
・創　　設：静岡県
・運　　用：県木連
・目　　的：本県の森林資源の循環利用による森林の適正な整備をはかるため、認定事業者による「県産材販売管理票」（マニュフェスト）の発行をとおして県産材の証明を行う。
・認定事業者数：470 社

3）合法木材供給事業者認定制度

・行動規範：平成 18 年 5 月 26 日 制定
・認定要領：平成 18 年 9 月　1 日 公表
・創設＆運用：県木連
・目　　的：県木連「違法伐採対策に関する行動規範」を踏まえ、所要の要件を備えた的確組合員の事業者認定を行い、「合法木材」の供給を促進する。
・認定事業者数：266 社

4）間伐材チップの確認に係る事業者認定制度

・行動規範：平成 21 年 4 月　1 日 制定
・認定要領：平成 21 年 4 月 21 日 公表
・創設＆運用：県木連
・目　　的：県木連「間伐材チップの確認に関する行動規範」を踏まえ、所要の要件を備えた的確組合員の事業者認定を行い、間伐紙への間伐材の積極的な利用を促進する。
・認定事業者数：１社

5）発電利用に供する木質バイオマスの証明に係る事業者認定制度

・行動規範：平成 24 年 10 月 24 日 制定
・認定要領：平成 24 年 11 月　1 日 公表
・創設&運用：県木連
・目　　的：「再生可能エネルギー電気の固定価格買取制度」に対する消費者の信頼性を確保するため、県木連「発電利用に供する木質バイオマスの証明に関する行動規範」を踏まえ、所要の要件を備えた的確組合員の事業者認定を行い、間伐材等由来の木質バイオマス及び一般木質バイオマスであることが証明された木質バイオマスの供給に努める。
・認定事業者数：49 社

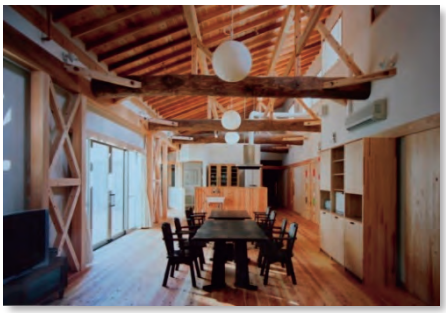
2020(令和 2)年 3 月 31 日 現在

33 産官学が連携した「高齢研」と「木環研」(2005～)
～ 居住環境、炭素固定、経済効果等の検証

2005(平成 17)年 3 月、静岡市に全国で 2 番目の本格的な木造による特別養護老人ホーム「竜爪園」(木造部の延床面積 2,049.44 ㎡、県産材使用量 352.6 ㎥、同使用率 68.2%)が竣工した。これを契機とし、大学関係者、研究者、福祉関係者、木材・建設関係者が「木造高齢者居住施設研究会」(略称・高齢研、代表・静岡大学農学部 安村 基教授、事務局・本会)を結成し、同施設のご理解のもと木造高齢者施設における温湿度等居住環境や地域材 68.2%使用による木材流通のトレースと炭素収支等建設に係る環境負荷、経済効果等に関する調査研究に着手した。1 年余りの研究の中間発表として 2007(平成 19)年 2 月、関連業界からパネラーを招聘し 270 余名の参加を得て公開シンポジウム「高齢化時代における自然循環型福祉施設を考える」を開催した。

その後、2011(平成 23)年 4 月、低炭素社会の実現に向けた公共木造施設等のあり方を総合的に研究するため、「しずおか木造環境評価研究会」(略称・木環研)へと発展的に改組し、木造の宿泊施設、学校施設、保育施設、体育館等多くの木造公共施設等の建設時、竣工後の空調等ランニングに係る CO_2 排出量ならびに温湿度等の環境性能の継続調査、介護スタッフ等施設利用者へのヒヤリング調査を行い、この成果の一端を関連学会で公表するとともに、静岡大学監修のもと各種 PR 資料を集約発行している。

発足から足掛け 15 年間、研究会の開催は既に 100 回を重ねたが、今後も時代に即した研究課題を模索しつつ、広く業界の振興につながる研究成果が期待されるところである。



▲左から：公開シンポジウムの開催（静岡市・グランシップ）、竜爪園 A 棟の住環境計測調査、調査対象施設・竜爪園内部

【関連資料】

シンポジウム資料：

・高齢化時代における自然循環型福祉施設を考える（2007 年）木造高齢者居住施設研究会

PR 冊子：

・人にやさしい空間づくり～木造高齢者施設における住環境調査（2009 年）静岡県木材協同組合連合会

・eco Research～木造観光宿泊施設「白樺荘」の建設に係る CO2 排出量の調査（2010 年）静岡県木材協同組合連合会

・適材適所～Wooden Textbook　木材は進化する（2015 年）静岡県木材協同組合連合会

34 大型化・効率化路線への対応（2006～）

～「水平連携」による 6 つの地域製材ネットワークグループ

2006(平成 18)年度から 2010(平成 22)年度の 5 年間、林野庁主導のもと「新生産システム対策推進事業」が展開された。全国 11 ケ所(秋田、奥久慈八溝、岐阜広域、中日本圏域、岡山、四国、高知中央・東部、熊本、大分、宮崎、鹿児島圏域)のモデル地域では、製材工場の生産力を増強し、地域材に対する引合いを強め、これに対応できる山元の生産力強化をはかるなど、山元と工場の「協定取引」や「原木の直送」を推進する「大型化・効率化路線」が推進された。

この間、2009(平成 21)年 12 月、農林水産省は 2020 年までに「木材需給率 50%」の達成を目指す「森林・林業再生プラン」を策定し、この一環として、2009(平成 21)年度以降 6 年間にわたり「森林整備加速化・林業再生事業」が実施された。県内でも間伐、林内路網整備、高性能林業機械導入、木材加工・流通施設整備、木質バイオマス利用施設整備、原木等流通コスト支援など、同事業を活用したさまざまな取組が進められた。

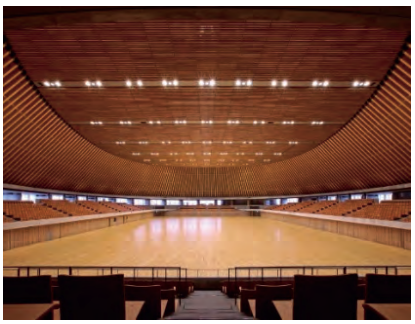
かかる状況下、2011(平成 23)年度、県では充実する森林資源を生産・活用するため「県産材生産 45 万㎥」に向け、川上の生産供給と川下の需要創造とを一体的に進める「ふじのくに森林・林業再生プロジェクト」をスタートさせた。この一環として、上記の加速化事業を活用する「大型加工場の本県誘致・進出問題」が浮上し、県外からの進出予定企業と本県の林業・木材業間で内部協議が重ねられた。本会では、理事会の諮問機関として木材産業振興対策委員会(柳川真佐明委員長)を設置し、単位木協からの意見書、素材生産業者の増産意向調査等を踏まえ、本件に係る課題の整理と今後の方針等実務問題が幅広く慎重に協議された。この結果、県内の森林資源を活かすことと、地域産業の育成ならびに地域雇用の確保・創出との両立をはかることを基本とし、大型公共事業等大口需要に対する対応策として山側との「垂直連携」による安定的な原木確保とあわせ、地域ごとに中小製材工場を「水平連携」させ、安定的な加工供給を図ることが提案された。

この委員会提言は理事会の了承を得て、翌 2012(平成 24)年度に天竜、大井川、安倍、富士の 4 地域の有志により製材ネットワークグループが先行発足し、2013(平成 25)年度には東部、伊豆の 2 地域でも有志グループが設立された。その後、県産材指定の公共納材事業や東京五輪関連施設等納材事業を通じ、個別グループの納材経験を踏まえグループ間の広域連携も実践され、着実に成果をあげている。

振り返れば、2006(平成 18)年、国内各地の木造空港現地調査と静岡大学・安村 基 教授等のご指導のもと、世界各国の木造空港事例検索等に基づき集約した富士山静岡空港の木材活用提言「TIMBER　WING 構想」を踏まえ、本会など関連 8 団体で構成する県産材利用推進協議会(榛村純一会長)が行った要請活動では大きな成果を得ることができなかった空港への木材活用は、地域製材ネットワークグループが有効機能した 10 年後の国際線ターミナル拡張工事において、一定の納材成果をあげることができた。

▲富士山静岡空港の木材活用提言・TIMBER-WING 構想

● ネットワークグループ：水平連携による納材事業



このはなアリーナ（静岡市）

富士山世界遺産センター（富士宮市）

日本平夢テラス（静岡市）

富士山静岡空港・国際線ターミナル（牧之原市）

● ネットワークグループ：各グループの PR パンフレット

①天竜材水平連携協議会、②CoC 大井川グループ、③オクシズネット（静岡市産材振興推進協議会）

④FUJI　HINOKI　MADE、⑤東静モク木サークル、⑥木ザ Izu（伊豆公共建築物木材利用ネットワーク）

35 3.11　東日本大震災余話 ～放射能汚染の風評被害と安全証明（2011～）

2011(平成 23)年 3 月 11 日、三陸沖を震源とするマグニチュード 9.0 の巨大地震により、岩手・宮城・福島を中心とする東北各県の太平洋側海岸部を大津波が襲い、住宅の全壊・半壊・一部損壊は 60 万棟余、死者 6,000 名余、負傷者 43,000 名余の甚大な被害をもたらした。加えて、津波により福島第一原子力発電所が稼働を停止、その後水素爆発を起こし「安全神話」が一気に崩壊した。

16 年前の阪神大震災とは違い、地震後の大津波がすべてを押し流したため、建築物等の被災状況の工学的な検証ができず、各地の放射性物質の気中濃度が公表される中、県内ではお茶、シイタケ等農産物に対し安全証明が求められ大混乱を来たした。

木材業界にあっては、工場被災、供給網の寸断で合板等建築諸資材の供給が停滞し、建築工事が大きく遅滞するとともに、生産･流通の各段階では家畜敷料･菌床栽培用のオガ粉はもとより、樹皮、国産材丸太・製品、輸入材製品にも「検査証明書」の添付が要求され、燃料利用に伴う焼却灰の処理方針など放射能汚染の「風評被害」への対策等、組合員から数多くの対応相談が寄せられ大混乱の中で終始することとなった。

本会では全木連等と連携し、林産物の放射能汚染に関するデータ収集、健康上影響のない科学的根拠の明示等、関連知見の集約と発信を通じて事態の鎮静化につとめた。また、阪神大震災同様、赤十字社を介して被災地に義援金を贈るとともに、被害の大きかった東北地域の 3 県木連に対し、全木連を経由して業界ルートの見舞金を贈った。

未曽有の大地震と大津波、これに誘発された原発事故は、国の原子力政策の根幹を揺るがし、汚染水・汚染土の終末処理、農水産物の風評被害、廃炉への長い道筋など、将来にわたる切実で大きな課題を投げ掛けられた。東海大地震の発生が危惧され、原発が立地する本県にとっても、災害時の事業継続計画(BCP)など、危機管理を抜本的に見直す契機となった。

▲目を疑う惨状がライブで報道された「大津波被害」と「原発爆発」